

イエスが語る復活

復活の主と共に生きることを学ぶ 50 日間

ジョン・スティーブン・ライト

イエスが語る復活

50 日間 復活の主と共に生きることを学ぶ

Copyright © 2026 John Stephen Wright

All rights reserved.

聖書の引用はすべて著者自身による翻訳です。

福音書の箇所は著者の出版済み四福音書合本調和「ジーザス・サーガ」から取られています。

旧約聖書の引用はセプトゥアギンタ (LXX) から翻訳されています。

その他の新約聖書の箇所はネスレ・アーラント第 28 版 (Novum Testamentum Graece) から翻訳されています。

著者の書面による事前の許可なく、印刷されたレビューの短い引用を除き、いかなる形においても本書の内容を複製、保存、送信することを禁じます。これは無許可の営利目的での使用を防ぐためです。ただし、この PDF は完全な文書として自由に他者と共有することができます。

この PDF の無料版をできるだけ多くの人に届けることが目標です。完全な文書として広くお分かちください。

献辞

「すべての国の人々を弟子とする」ことに生涯を捧げてきたすべての方に。

その働きのほとんどはこの世では知られていません。

しかし復活の主はそのすべてを知っておられます。

「よくやった」というイエスのことばが、彼らへの報いです。

目次

第一部	イースターの日曜日：復活による方向転換
第1日	そうなると言われた
第2日	亜麻布の無言の証言
第3日	だれを捜しているのですか
第4日	マリアと呼ばれたとき
第5日	わたしの父、あなたがたの父
第6日	わたしの兄弟たちのところへ行きなさい
第7日	あなたがたより先に行かれます
第8日	何を話し合っていたのですか
第9日	鈍い心と燃える心
第10日	パンを裂くこと
第11日	主は本当によみがえられた
第12日	鍵のかかった部屋の平和
第13日	わたし自身です
第14日	すべては成就されなければならない
第15日	御子が遣わされたように遣わされる
第16日	息を吹きかけられた
第17日	力を着せていただくまで
第二部	回復
第18日	疑うことをやめなさい
第19日	見ないで信じる者は幸いです
第20日	舟の右側に網を打ちなさい
第21日	復活の主との朝食
第22日	あなたはわたしを愛していますか
第23日	わたしの小羊を養いなさい
第24日	本当にわたしを愛していますか
第25日	あなたが若かったころ
第26日	わたしに従いなさい
第三部	権威と使命
第27日	天においても地においても、いっさいの権威が

- 第 28 日 全ての国の人々を弟子としなさい
- 第 29 日 行き続けなさい
- 第 30 日 聖霊のバプテスマを受けなさい
- 第 31 日 全てのことを守るように教えなさい
- 第 32 日 わたしはいつもあなたがたとともにいます
- 第四部 約束の説明
- 第 33 日 聖霊に浸されます
- 第 34 日 わたしと同じもう一人の助け主
- 第 35 日 その日にあなたがたはわかります
- 第 36 日 御霊はすべてを教え、思い起こさせてくださいます
- 第 37 日 わたしが去るのはあなたがたに有益です
- 第五部 復活の主はその働きを続けておられます
- 第 38 日 それからヤコブに現れました
- 第 39 日 あなたがたは力を受けます
- 第 40 日 あなたがたはわたしの証人となります
- 第 41 日 祝福しながら離れて行かれました
- 第 42 日 イエスは聖霊を注いでくださいました
- 第 43 日 主は毎日仲間に加えてくださいました
- 第 44 日 立っておられる人の子
- 第 45 日 なぜわたしを迫害するのですか
- 第 46 日 この目的のためにわたしはあなたに現れました
- 第 47 日 アナニア、サウロのところへ行きなさい
- 第 48 日 わたしのために聖別しなさい
- 第 49 日 この町にはわたしの民が大勢います
- 第 50 日 わたしの力は弱さの中で完成されます

はじめに

復活されたイエスは語られる

イエスの地上の生涯は勝利の叫びで幕を閉じました。「永遠に完成した。」

しかしその叫びは、イエスの宣教を終わらせたものではありませんでした。一つの段階を終わらせ、新しい段階を始めたのです。最初の段階は肉と血のからだにおける三十三年間でした。第二の段階は空の墓から始まり、新しい契約のもと永遠に続きます。

四十日間、復活されたイエスは弟子たちと共に歩まれました。彼らを立て直し、指導者たちを回復させ、使命を定め、御霊に備えさせるためでした。四十日目に昇天されました。十日後にペンテコステで御霊が来られました。この五十日間が人類の歴史の流れを変えました。この礼拝のための書はその日々を歩み、御霊の時代の生活のために民を備えられる復活されたイエスの声に耳を傾けます。

「思い出しなさい」

女たちが空の墓に着いたとき、恐れ混乱していた彼女たちに、御使いたちは一つの命令を与えました。

「まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにどのように話されたかを思い出しなさい。『人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない』と言われたではありませんか」

ルカ 24:6-7

思い出しなさい。これがこの本の方法です。

復活されたイエスは新しい神学をもたらしませんでした。すでに語られたことばをもたらされました。今や成就によって照らされたことばを。破滅のように見えたことが、最初からの計画でした。イエスのご自身の解釈者です。そしてイエスのことばが、すべての復活顕現を理解するためのレンズです。

イエスのことばを思い出すことは懐古的な営みではありません。それは生きた信仰の基盤です。イエスはこう約束されました。

「助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」

ヨハネ 14:26

御霊の宣教は聖なる記憶の宣教なのです。御霊はわたしたちに思い起こさせてくださるのです。

方法について

イエスはことばと行動の両方によって弟子たちを形成されました。イエスの御業は単なる力の誇示では決してありませんでした。それはしるしであり、それぞれが意図的なメッセージを持っていました。

復活されたイエスも同じ方法で伝えられました。このシリーズの五つの日において、わたしたちは語られたことばではなく、復活の行動を通してイエスの声を聞きます。これらは方法の例外ではありません。これらは完全な形の方法です。

物語は十字架で終わりませんでした。空の墓で終わりませんでした。昇天で終わりませんでした。ペンテコステでそのクライマックスに達し、そして今も続いています。

復活されたイエスは語られます。イエスが言われたことを学び、覚えなさい。

第一部

イースターの日曜日：復活による方向転換

イエスの生涯において、福音書の中で他のどの日とも異なる日が二日あります。それは、イエスが死なれた日と、墓から復活された日です。イースターの日曜日、イエスは夜明けから夜更けにかけて、弟子たちに五度異なる形で現れました。福音書に記録されている他の七回の出現は、残りの三十九日間に分散しており、一度に一回の出現にすぎません。

この最初の復活の日、イエスは弟子たちを、新たに創られた霊的なからだにおける御自身の臨在へと方向転換させておられました。そのからだは通常は目に見えないものでしたが、御心のままに目に見える形で現れることができました。イエスは同じイエスであり、今や新しい形で臨在しておられました。今日の信者が経験する復活の主も、まさにその同じ主です。したがってイースターの出現は、新しい創造、新しい契約、そしてイエスと共にある新しいあり方の夜明けを告げるのです。

第1日

「そうなると言われた」

「まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにどのように話されたかを思い出さない。『人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない』と言われたではありませんか」

ルカ 24:6-7

「よみがえられた。」

女たちは夜明け前に、死なれた方を敬うために墓へやって来ました。良い知らせを期待して来たのではありませんでした。すると突然、稲妻のように輝く衣をまとった二人の御使いが現れ、女たちは恐れおののいて地に伏しました。

御使いたちが最初にしたことに注目されます。御使いたちは単に復活を告げ知らせたのではなく、女たちに思い出すよう命じました。「どのように話されたかを思い出さない」と。そしてイエスご自身のことばを女たちに引用して聞かせました。御使いたちは新しい真理を告げていたのではなく、イエスがすでに語られたことへと女たちを立ち返らせていたのです。

これは復活の解釈における最初の行為であり、この五十日間に続くすべてのことの型を確立しています。復活への信仰は、御使いたちの証言、あるいは空の墓だけに基づくことを意図されていませんでした。それはイエスご自身のことば、すなわち十字架の前に語られ、墓の向こうで成就され、今や空の墓の光の中で思い起こされることばの上に置かれることを意図されていたのです。これはイエスが約束されたことの成就です。これが新しい契約の基盤となるものなのです。

御使いたちはまた、女たちにガリラヤへ行くよう伝えました。そこでイエスが彼女たちと会われるからです。ガリラヤはイエスが宣教の中心を過ぎられた場所であり、最も長い時間を弟子たちと共に教え、いやし、形成してきた地でした。そこで弟子たちに与えられる大宣教命令は、イエスが宣教を通じて語られたすべてのことの成就でした。ガリラヤに戻ることは、そのことばへ立ち返ること、そしてそのことばの一つひとつが今も生きていることを発見することでした。

御使いたちはさらに一つの問いを投げかけました。「なぜ、生きている方を死人の中に捜すのですか」と。イエスご自身がかつて言われたように、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神です」。イエスの生きたことばへと立ち返るたびに、すでに聞く必要のあるすべてのことを語ってくださっていることを発見し、わたしたちはこの真理に気づくのです。

振り返り

御使いたちは女たちが何も目にする前から、イエスがすでに語られたことへと彼女たちを向けました。あなたが今日最も立ち返る必要のあるイエスのことばはどれでしょうか。完全に成就されたものとして覚え、信頼すべきことばは何でしょうか。

生けるイエスだけが満たすことのできる必要を、命を与えることのできないものに求めていないでしょうか。

第2日…第1回復活顕現

「亜麻布の無言の証言」

「彼は見て、信じた」

ヨハネ 20:8

マグダラのマリアは夜明け前に墓に着き、石が取りのけられているを見つけました。調べるのも待たず、ペテロとヨハネを探して走って行きました。「主を墓から取って行きました。どこに置いたのか、わかりません」と告げながら。

ペテロとヨハネはすぐに墓へ向かって走り出しました。ヨハネが先に着いて、亜麻布が置いてあるのを見ましたが、中には入りませんでした。ペテロは勢いよく中へ入り、亜麻布が置いてあり、イエスの頭を包んでいた布が亜麻布と一緒に置かれていたのではなく、別の所に巻かれているのを見ました。それからヨハネが入りました。彼は見て、信じたのです。

ヨハネはその埋葬布を描写するのにギリシア語の完了時制を用いています。亜麻布はイエスのからだに巻かれていたときと同じ位置に横たわっていました。イエスのからだはそのままそれらを通り抜け、亜麻布はただその場に崩れ落ちていました。まだ輪の形を保ち、からだの形のままで。それがそのように配置されていた自然な説明はありません。

顔を覆っていた布は違いました。イエスご自身がそれを折りたたんでいたのです。それは復活の生涯における最初の意図的な行為でした。イエスは急いでいませんでした。逃げていたのでもありません。完全な平安の中によみがえり、布を折りたたんで墓を出られました。イエスは埋葬布を通してメッセージを残されたのです。

この証拠はヨハネが復活されたイエスを見る前に、そして復活を予告する聖書を理解する前に、彼を納得させました。これが物的証拠に基づいて信じた最初の人物なのです。ペテロはヨハネが見たものをすべて見ましたが、テキストには彼が信じたとは書かれていません。彼は驚きながら墓を去り、見たものを受け止めようと思いを巡らせていました。イエスはその日の後にペテロに個人的に現れたのでした。

空の墓は歴史の否定できない事実です。あの埋葬布の位置は一つの説明しか指し示していません。クリスチャンはイエスのことば、聖書、証拠、そして生ける主との個人的な経験に基づいて、イエスはよみがえられたと大胆に宣言することができるのです。

振り返り

ヨハネは物的証拠に基づいて、復活されたイエスを見る前に復活を信じました。その証拠はあなた自身のイエスのことばへの確信をどのように強めるでしょうか。

あなたは復活の証拠をどれほどよく知っているでしょうか。それをより明確に把握することは、より大きな大胆さをもってそれを語る備えとなるでしょうか。

第3日…第1回復活顕現（続き）

「だれを捜しているのですか」

「女よ、なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか」

ヨハネ 20:15

ペテロとヨハネは家に帰りました。マリアはそこに留まりました。

マリアは墓の外に立って泣いていました。数滴の涙ではなく、絶え間なく泣き続けていました。かがんで中をのぞくと、イエスのからだが置かれていた所に、白い衣をまとった二人の御使いが座っているのが見えました。御使いたちはなぜ泣いているのかと尋ね、マリアは告げました。イエスを捜しているのだと。マリアはイエスがすでに彼女を捜しておられることを知らなかったのです。

そして振り向くと、イエスが立っておられましたが、彼女にはわかりませんでした。イエスを庭師だと思い込んで、必死の願いを口にしました。「あなたがあの方を運び去ったのなら、どこに置いたかを教えてください。わたしが引き取ります」と。そのからだを自分で運ぶ覚悟でいたのです。

イエスはマリアに二つの問いを投げかけました。「女よ、なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか」と。これは復活されたイエスがいかなる人にも最初に語られたことばです。表面上、マリアは死なれた主のからだを捜していました。しかしこの問いは目の前の状況よりも重い意味を持っています。イエスはこの問いをかつてゲッセマネで、兵士たちが逮捕しに来たときにも問われました。それはすべての人の心の問いです。あなたは本当にだれを捜しているのですか。

マリアはイエスを見た目では認識しませんでした。まもなく御声によって認識することになります。その前に、復活されたイエスはマリアの前に立って待っておられました。イエスは捜している者から隠れていたのではなく、すでにマリアを見つけておられました。それでもマリアにはわかりませんでした。マリアは復活されたイエスのみそばにいたのに、それを知らなかったのです。泣いているのも無理のないことでした。

イエスがこの最初の出現にマリアを選ばれたのには理由がありました。ヨハネ 14 章でイエスはこう言われていました。「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛してその人にわたし自身を現します」と。マリアはその従順によってイエスを愛していました。十字架のそばに立っていました。夜明け前に来ていました。他の人が去ったときも留まっていました。イエスは必ずことばを守られます。イエスはご自身を愛する人に現れました。あなたにも現れてくださるのです。

振り返り

あなたは本当にだれを捜しているのでしょうか。あなたの日々の生活は、本当に何を求めているかを表しているのでしょうか。

マリアは熱心で犠牲を伴う従順によってイエスを愛しました。彼女の模範は、あなたがイエスを知ることを追求める方法にどのような挑戦を与えるのでしょうか。

第4日…第1回復活顕現（続き）

「マリアと呼ばれたとき」

「マリア」

ヨハネ 20:16

必要だったのは一つのことばだけだったのです。

マリアがまだ庭師だと思っていた人を見ているとき、イエスがマリアの名を呼ばれました。「マリア」と。マリアは振り向きました。完全な方向転換です。そしてアラム語で叫びました。「ラボニ！」と。マリアはイエスだとわかりました。顔ではなく、御声によって。名を呼ぶそのお声によって。

イエスはまさにこの瞬間のために弟子たちを備えておられました。ヨハネ 10 章でイエスはこう言われていました。「羊飼いは自分の羊をその名で呼んで連れ出します…わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます」と。マリアはイエスの羊であり、この地上にイエスの御声に勝る音はありませんでした。

イエスはマリアのことを完全に知っておられました。七つの悪霊からマリアを解放し、尊厳と命を回復されました。マリアはガリラヤからエルサレムまでイエスに従い、弟子たちが逃げたときも十字架のそばに立ち、他の人々がまだ眠っているときに夜明け前に来ていました。今イエスはマリアの名を呼ばれました。これは「わたしは自分のものを知っている」というイエスの約束の成就でした。

この瞬間の前に、イエスは問いを投げかけていました。今や名を呼ばれました。一つのことば、そしてすべてが変わりました。一人の人が完全に知られ、直接呼ばれました。これが復活されたイエスがわたしたちひとりひとりのもとに来られる方法なのです。

マリアはイエスの足もとにひれ伏して抱きつきました。イエスの答えは優しくも毅然としたものでした。「わたしにすがりついてはいけません」と。これは拒絶ではなく、方向転換でした。マリアはかつての関係の形にしがみついていることはできませんでした。復活は新しいものを開いていました。目に見える物理的な近さに限定されず、御霊を通していつもどこでも与えられる臨在です。イエスはマリアを離れて行くのではなく、より少なくではなく、よりいっそう臨在するようになったのです。

イエスはすぐにマリアを遣わしました。「わたしの兄弟たちのところへ行って」と。見出された者は遣わされる者となります。マリアは行って宣言しました。「わたしは主を見ました」と。

振り返り

イエスはマリアが気づく前に名を呼ばれました。イエスに個人的に完全に知られていることは、あなたがイエスとの関係を理解する方法をどのように変えるのでしょうか。イエスがあなたの名を呼んでおられるのを聞いたことがあるのでしょうか。

イエスがお与えになりたい新しい形の臨在を受け取ることを妨げているような、古い形のイエスとの出会い方にしがみついていることはないでしょうか。

第5日……第1回復活顕現（続き）

「わたしの父、あなたがたの父」

「わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上ります」

ヨハネ 20:17

イエスが弟子たちに一団として現れる前に、マグダラのマリアを通して先にメッセージを送られました。これはイエスが最初に届けさせたかった具体的なことばでした。復活の最初の宣言の内容です。「わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上ります」と。空の墓の証明ではありませんでした。起きたことへの弁明でもありませんでした。関係の宣言です。わたしのものである父が今やあなたがたのものでもあるという宣言です。

宣教を通じて、イエスは永遠から独自に分かち合っておられる「わたしの父」について語ってこられました。「わたしと父とは一つです」と。イエスの御子としての立場は永遠のものであり、造られておらず、存在の根拠そのものでした。しかし今、イエスは二つをひとつの息に結びつけました。わたしの父、あなたがたの父と。この区別を消し去っているではありません。イエスの御子としての立場と弟子たちの立場は同じではありません。しかし弟子たちは同じ家族の中に迎え入れられたのです。

このことばは旧約聖書の契約の定型句のこだまを帯びています。神が民と結ばれたすべての契約の中心には、「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」（エレミヤ31:33）という約束がありました。これはエレミヤが心に刻まれる新しい契約を約束したことにおいて最も完全に表現されています。イエスは復活の朝、ひとつの息の中でその約束を成就されていました。わたしが属している神が、十字架の向こう側で今やあなたがたの神でもあります。新しい契約は到来しました。

弟子たちは失敗していました。散り散りになり、否定し、身を隠していました。そしてイエスが彼らに最初に伝えたメッセージは、責任追及ではなく、招きでした。わたしの父はあなたがたの父です。十字架はすべての障壁を取り除き、復活はそれを永遠に確認したのです。

パウロは後にこれをローマ8章で展開しました。「あなたがたは、養子の御霊を受けたのです。この御霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と呼びます」と。「父よ」と呼ぶその御霊は、復活されたイエスの御霊です。復活の朝に「わたしの父、あなたがたの父」と語られた、まさにその同じイエスの御霊です。

振り返り

復活の後、イエスが弟子たちに最初に伝えたメッセージは、父なる神との回復された関係についてでした。あなたは神が本当にあなたの父であるという確信をもって生きているでしょうか。もしそうであれば、何が変わるでしょうか。

「わたしの父、あなたがたの父」。これが福音の核心です。あなたはこの真理を今日どのようにより完全に受け取る必要があるでしょうか。

第6日…第2回復活顕現

「わたしの兄弟たちのところへ行きなさい」

「恐れることはありません。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤに行くよう告げなさい。そこでわたしに会えます」

マタイ 28:10

マグダラのマリアへの出現の後、イエスは最初に空の墓を発見した女たちの大きな一団に現れました。彼女たちはイエスのみもとに来てその足を抱き、礼拝しました。それからイエスは語られました。

すぐに二つのことが際立ちます。第一は「兄弟たち」ということばです。イエスはすでにマリアを通してこのことばを使われていました。今またイエスはそれを使われました。「弟子たち」でも「十一人」でもなく、「わたしの兄弟たち」と言われました。これらは逮捕の際に逃げた者たち、その中でペテロが三度イエスを否定した者たち、今は悲しみと恥に打ちひしがれて身を隠している者たちでした。普通の関係では、裏切られた者がよみがえって裏切った者たちを兄弟と呼ぶことはありません。しかしイエスはそうされました。

イエスはヨハネ 17 章でこのことを祈っておられました。今、復活の生涯の最初の瞬間に、同じ朝に二度これを宣言されました。復活は弟子たちの失敗を消し去るのではなく、赦し、回復します。彼らは神の家族の中の兄弟たちだったのです。

第二は命令です。「恐れることはありません」と。その朝、恐れはいたるところにありました。空の墓で、御使いたちを見て、道で、屋上の部屋で。イエスはそれに直接向き合われました。困難な状況を取り除かれたのではなく、恐れを目的に置き換えました。行きなさい。告げなさい。なすべきことがあり、生けるイエスは出会われるのを待っておられるのです。

ガリラヤへ行くようにという命令は重要な意味を持っていました。ガリラヤはイエスが弟子たちに福音を宣べ伝え訓練するために最も多くの時間を費やされた場所です。大宣教命令はそこで与えられるのです。ガリラヤでイエスに会うことは、イエスが宣言された計画にとって不可欠でした。すでに語られたことばのすべての上に築かれた計画なのです。

振り返り

イエスは失敗し身を隠していた弟子たちを「わたしの兄弟たち」と呼ばれました。これはあなた自身の失敗に関わらず、復活されたイエスがあなたをどのように見ておられるかについて何を教えているのでしょうか。

復活されたイエスは今日、あなたに恐れ代わりに目的を持つようにとどこへ呼んでおられるでしょうか。

第7日

「あなたがたより先に行かれます」

「イエスは死人の中からよみがえられました。そしてあなたがたより先にガリラヤへ行かれます。そこでイエスにお会いできます。確かにそう申し上げておきます」

マタイ 28:7；マルコ 16:7

御使いたちが空の墓で女たちに伝えたメッセージの中に、見落としてしまうほど単純な約束がありました。「あなたがたより先に行かれます」という約束です。

彼女たちがイエスを見つけるのを待っているのではありません。彼女たちがどうすべきかを考えている間、じっと立っているのでもありません。行っておられます。先に。先導しておられます。

これは羊飼いのことばです。ヨハネ 10 章でイエスはまさにこのたとえを用いられていました。「羊飼いは羊の前を歩き、羊はその声を知っているのについて行きます」と。羊飼いは群れを後ろから追い立てるのではなく、前に立って未知の場所へと先に進んで先導します。復活されたイエスはまさに約束されたことをされてきました。死の中へ、そしてそれを通り抜けて復活の命へと先に進まれていました。今、ガリラヤへ先に行っておられます。

マルコの記録は注目すべき一句を加えています。「確かにそう申し上げておきます」と。もう一つの思い起こしです。覚えなさい！最後の晩餐で、逮捕される数時間前に、イエスはこう言われていました。「わたしはよみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行きます」と。弟子たちはそれを保持していませんでしたが、イエスはそう言われていました。そして今それが成就されてきました。イエスのことばは完全に信頼することができるのです。

この詳細は後に続くすべてのことを指し示しています。ガリラヤへ先に行かれた復活されたイエスは、そこで弟子たちに使命を与えられました。そしてその後の使命のあらゆる瞬間においても、同じ真理が保たれています。使徒の働きは、民を前へと導き、彼らには開けない扉を開き、牢獄で、道で、嵐の中で彼らに会われる復活の主の物語です。いつも先に。いつも導いておられます。

イエスは今日もあなたより先に行っておられます。あなたがこれから入ろうとしている未知の場所がどこであれ、復活されたイエスはすでにそこに行っておられます。そしてあなたについて来るよう呼んでおられるのです。

振り返り

あなたの生活のどの分野で、復活されたイエスがあなたより先に行っておられるという確信を最も必要としているでしょうか。

マルコは「確かにそう申し上げておきます」と加えました。あなたが今日最も立ち返り、今もなお有効で信頼できるものとして信じる必要のあるイエスのことばはどれでしょうか。

第8日…第3回復活顕現

「何を話し合っていたのですか」

「歩きながら、ふたりで何を話し合っているのですか」

ルカ 24:17

復活の日曜日の午後のことでした。二人の弟子がエルサレムからエマオへ向かって歩いていました。約十一キロ先です。起きたことすべてについて話し合いながら歩いていました。会話は悲しみと混乱に重く沈んでいました。そこに見知らぬ方が近づいてきて、一緒に歩きながら何を話しているのかと尋ねました。

二人は立ち止まりました。顔は悲しみに沈んでいました。クレオパはほとんど信じられない様子でした。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起きた事をご存じないのは、あなただけではありませんか」と。皮肉は際立っていました。イエスは地上で何が起きたかを完全に知っておられる唯一の方でした。なぜならご自分でそれを生き、苦しみ、死に、そしてよみがえられたからです。それでもイエスは二人と一緒に歩き、話してくれるよう求められました。「しかし彼らはイエスに会いませんでした」という言葉で終わる二人の話全体を、辛抱強く聞かれました。

さらに皮肉なことに、二人の目は復活されたイエスを見ていたのに、それがイエスだとはわからなかったのです。マリアと同様に、二人の理解はまだ現実に追いついていませんでした。目は物理的な変装によって遮られていたのではなく、悲しみと砕かれた期待というレンズを通して見ていたのです。信仰によって本当にイエスを見た瞬間、イエスは目の前から消えました。物理的な視覚はもはや必要ではなかったのです。

イエスがどのように二人のもとに来られたかに目を向けるのです。ご自身を名乗られませんでした。二人の混乱を叱責で遮ることもしませんでした。二人のペースと一緒に歩き、扉を開く問いを尋ねました。二人と交わりを持たれました。これは辛抱強い、急がない愛でした。復活されたイエスは急いでおられません。混乱し悲しんでいる弟子たちのそばに来て、一緒に歩き、失った重みのすべてが語られるまで待つてから応じられます。

そしてイエスが応じるとき、最初に与えるのは慰めではありません。聖書です。気分が良くなるだけのものではなく、本当に必要なものを与えられるのです。

振り返り

今あなたが抱えていて、復活されたイエスの前で正直に語る必要のあることは何でしょうか。あなたが歩きながら抱えている砕かれた希望は何でしょうか。

イエスはエマオの弟子たちに辛抱強く急がない臨在をもって会い、それから聖書を開かれました。これはあなたが悲しみと混乱の季節に、イエスがどのようにあなたに会ってくださるかを理解する方法をどのように形作るでしょうか。

第9日…第3回復活顕現（続き）

「鈍い心と燃える心」

「聖書のすべての預言者が言ったことを信じるとは、なんと物わかりが悪く、心が鈍いのでしょうか」

ルカ 24:25

二人の弟子は見知らぬ方にすべてを話しました。話は「しかし彼らはイエスに会いませんでした」という不在で終わりました。イエスは答えました。「聖書のすべての預言者が言ったことを信じるとは、なんと物わかりが悪く、心が鈍いのでしょうか。メシアはこれらの苦しみを受けてから、その栄光に入るはずではなかったのですか」と。

これは厳しい叱責ではなく、教師による訂正でした。問題は知性ではありませんでした。方向性の問題でした。二人は預言者たちが明確に書いていたことを信じるのが遅く、抵抗があったのです。聖書を正直に完全に読めば、まさにこのことを指し示していました。苦しみを回避してではなく、苦しみを通して栄光に入るメシアのことを。

弟子たちはイエスの受難の予告を聞きながら、本当には受け取っていませんでした。自分たちの期待に合わないものをふるい落とし、自分たちが作り上げたメシア像の上に希望を築いていたのです。イエスはその像に合わなかったとき、希望は崩れました。しかし問題はイエスにあったのではなく、信じるのが遅かった彼ら自身にあったのです。

「はずではなかったのですか」ということばは大きな重みを持っています。ギリシア語のデイ、すなわち「必要である、そうでなければならぬ」ということです。十字架と空の墓は歴史の偶然の出来事ではありませんでした。神の計画であり、あらかじめ語られ、精確な細部において成就されたものです。モーセから始まり、すべての預言者を通じて、イエスはご自身に関して聖書に書かれていることを説き明かされました。

イエスが教えておられる間に、二人の内側で何かが起きました。後に二人はこう言うことになります。「道で話しかけてくださったとき、聖書を説き明かしてくださったとき、わたしたちの心は内で燃えていたではありませんか」と。燃える心は、御言葉を通して復活されたイエスに出会うしるしです。鈍い心は、生ける主がご自身の成就されたテキストを通してご自身のことばで語られるとき、燃える心となるのです。

振り返り

聖書が明確に教えていることを信じるのが遅かった分野はどこでしょうか。あなた自身のどのような期待が、神から受け取ろうとするものを形作っているでしょうか。

御言葉が開かれるとき、あなたの心が内で燃えた経験はいつでしたか。復活されたイエスとのそのような出会いのための余地をどのようにして増やすことができるでしょうか。

第 10 日…第 3 回復活顕現（続き）

パンを裂くこと

「一緒に食卓につかれたとき、イエスはパンを取り、祝福してから裂いて、彼らに渡されました」

ルカ 24:30

エマオの村が見えてきました。二人と一緒に歩き、心に火をともした見知らぬ方は先に進もうとされていたが、二人は強く求めました。「私たちと一緒に泊まりください。もう夕方になりますし、日も傾きました」と。イエスは一緒に泊まるために中に入られました。

食卓に着くと、イエスはいつもされていたことをされました。パンを取り、感謝し、裂いて渡し始められました。すると二人の目が開け、イエスだとわかりました。そしてイエスは目の前から見えなくなりました。

イエスがパンを取り、感謝し、裂くそのお姿には見まごうことのないものがありました。二人はその仕草を以前に見ていました。五千人の給食のとき、最後の晩餐のとき、共に歩んだ年月の中での食事のときに。イエスのように祈る方はいませんでした。道での長い聖書の学びの中ではなく、パンを裂くときに識別が起きました。もっとも、その学びは心に火をともしていましたが。これは今もなおわたしたちがイエスを覚え、イエスと交わる中心的な場所であり続けているのです。

イエスだとわかった瞬間、イエスは消えました。これは意図的なことでした。イエスはこの出現全体を通じて、御自身の臨在は物理的な見え方に依存しないことを教えておられました。イエスが消えたのは、二人が物理的な出現にしがみつかないようにするためでした。ちょうどイエスが庭園でマリアの方向を変えられたように。復活は過去の回復ではありませんでした。新しいものの始まりだったのです。目に見えない、絶え間ない臨在として。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

二人はすぐに立ち上がり、エルサレムへ引き返しました。暗闇の中を十一キロ戻ったのです。起きたことが自分たちだけのものにするには重大すぎたからです。十一人を見つけると、こんな言葉を聞きました。「主は本当によみがえられました。シモンに現れたのです！」そして二人は自分たちの話を語ったのでした。パンを裂くときにイエスがわかったと。

教会がともにパンを裂くために集うたびに、この物語がこだまします。イエスはパンを裂くときに知られます。復活されたイエスのご自身の食卓に臨在し、御言葉は心に火をともし、その臨在はわたしたちを養い変えるのです。

振り返り

弟子たちは普通の食卓での普通の行為の中に復活されたイエスを認識しました。あなたが注意を払っていれば、日々の普通の瞬間のどこでイエスに最も出会いやすいでしょうか。

弟子たちはすぐに立ち上がり、暗闇の中を十一キロ戻って他の人に告げました。復活されたイエスとの出会いにそのような緊迫感をもって応じることはどのようなことでしょうか。

第11日…第4回復活顕現

「主は本当によみがえられた」

「本当に主はよみがえられました。そしてシモンに現れました」

ルカ 24:34

エマオの二人の弟子はすぐに立ち上がり、他の人に起きたことを告げるためにエルサレムへ引き返しました。十一人を見つけると、自分たちが語る前にすでに知らせを受けていました。「主は本当によみがえられました。そしてシモンに現れたのです。」

この第四の復活顕現については詳細は何も与えられていません。ただそれが起きたということだけが告げられています。ペテロとイエスは、あの長いイースターの午後のどこかで、エルサレムで個人的に会ったのです。パウロはコリント人への手紙第一 15 章でそれを確認しています。「イエスはケファに現れ、それから十二使徒に現れました。」それがわたしたちの知るすべてなのです。

イエスはマグダラのマリアと忠実な女たちには、その愛と従順のゆえに現れました。ペテロには、ペテロが最も打ちひしがれていたからこそ現れました。十字架の前にイエスを三度否定したことは、弟子たちの中で最も深い失敗でした。ペテロは他の誰よりも、イエスと面と向かって会う必要がありました。

イエスはそれが来ることを知っておられました。最後の晩餐でペテロの失敗のために特別に祈られていました。ユダヤ人の裁判の最中に、三度目の否定の瞬間に、イエスは振り向いてペテロをじっと見つめました。その目は責めていませんでした。転落をすでに予測し、回復をすでに計画していた羊飼いの目でした。ペテロを打ちのめしたことは、イエスにとっては驚きではなかったのです。

空の墓の御使いはペテロを名指しで取り上げていました。「弟子たちに、そしてペテロに告げなさい。」イエスはペテロが一步も踏み出す前から、傷ついたしもべのほうへと手を差し伸べておられました。ペテロはそれでも愛され、それでも求められていたのです。

今、二人で都の中に一緒にいて、イエスはペテロを個人的に回復されました。しかしペテロは失敗において一人ではありませんでした。彼ら全員がイエスと共に死ぬと誓っていました。彼ら全員が逃げていました。ペテロを回復することで、イエスはあの散り散りになった一団の弟子たち全員のほうへと手を差し伸べておられました。もう一段階残っていました。後にガリラヤの海のほとりで、イエスは回復を公に完成されます。しかしそれはここで、打ちひしがれた弟子と復活された主との間で、個人的に始まりました。イエスの恵みはすべての失敗に十分なのです。イエスの力は強さの中ではなく、弱さの中で完成されるのです。

振り返り

今日あなたが復活されたイエスのもりに持つていく必要のある弱さや失敗は何でしょうか。まさにそこでイエスの力が完成されると信頼しながら。

イエスはあなた自身の失敗の経験をどのように用いて、イエスご自身への依存を深めさせておられるでしょうか。

第12日…第5回復活顕現

「鍵のかかった部屋の平和」

「あなたがたに平和があるように」

ルカ 24:36；ヨハネ 20:19

復活の日曜日の夕方でした。弟子たちは恐れて鍵のかかった部屋に集まっていました。マグダラのマリアから、女たちから、ペテロから、エマオへ向かった二人から報告を聞いていました。すべての報告が同じことを言っていました。イエスは生きておられると。それでも扉は鍵がかかっていた。恐れと希望の不思議な混じり合いが部屋を満たしていたのです。そこへイエスご自身が来られました。

これはその日の第五の復活顕現でした。イエスは夜明け前の庭園でのマグダラのマリアから始めて、夕方の集まった共同体で終わりました。その週の最初の日の一時間一時間を、復活された臨在の出現で満たされたのです。弟子たちはこの日に新しい名前をつけることになるのです。主の日と。

復活されたイエスのからだを鍵のかかった扉は阻むことができませんでした。イエスは突然、彼らの真ん中に現れました。中心の場所に。そして最初のことばは、「あなたがたに平和があるように」でした。

ヘブライ語の世界では、シャロームは争いの不在以上の意味を持っていました。それは全体性、神と人と創造の間のすべてのことの正しい秩序を意味していました。数日前、上の部屋でイエスはこう約束されていました。「わたしはあなたがたに平和を与えます」（ヨハネ 14:27）と。また、この世にあっては苦難があると言われていました。しかしイエスはこの世に勝っておられます（ヨハネ 16:33）と。十字架がその勝利でした。復活はその確認でした。

イエスが彼らに示された傷跡は、贖いの永遠の証拠です。イエスが「あなたがたに平和があるように」と言われたとき、それは彼らの幸いを願う一般的な挨拶ではありませんでした。成し遂げられた事実の宣言でした。神と人の間の障壁はなくなりました。平和、シャロームのその最も豊かな意味において、交渉によってではなく新しい契約の血によって実現されています。

弟子たちは主を見て非常に喜びました。しかし喜びは大きすぎて、それが現実だとはほとんど信じられませんでした。そこでイエスは食べるものを求められ、彼らの前で焼いた魚を一切れ食べられました。イエスは本当に生きておられました。変えられ、栄化されてはいますが、本物のからだで。また彼らは食事の中にイエスを認識したのでした。

復活されたイエスは今も、鍵のかかった部屋に、つまり民が恐れの中で集まっているところならどこにでも、このことばを語られます。「あなたがたに平和があるように。」状況が容易だからではなく、平和を保証した御業がすでに、一度限り成し遂げられているからなのです。

振り返り

イエスが鍵のかかった部屋で宣言した平和は感情ではありません。それは成し遂げられた事実です。それを今日受け取るとはあなたにとってどのような意味があるのでしょうか。願いとしてではなく、すでに保証された現実として。

あなたの共同体が彼の平和と一緒に受けることはどのようなことでしょうか。たまたま集まる個人としてではなく、同じ復活の主を保たれる民として。

第13日

「わたし自身です」

「わたしの手、わたしの足を見なさい。まさしくわたし自身です。触って確かめてください。幽霊には肉も骨もありません。わたしにはあるのです」

ルカ 24:39

イエスは重要な点を示しておられました。ギリシア語でイエスは可能な中で最も強調的な形式を選びました。エゴー・エイミ・アウトス、「わたし自身がいる」です。ギリシア語は動詞が主語を含むので、人称代名詞を別に必要としません。イエスが「わたし自身」という人称代名詞を加えられたのは、二重の強調でした。単に「わたしです」ではなく、「わたし、わたし自身が、個人的に、これがあなたの前に立っているものだ」と主張されていたのです。

ルカとヨハネの両方が、イエスが彼らに傷跡を見せ、平和を語られたことを記録しています。傷跡はまだありました。十字架の永遠の署名が復活されたからだに残っていました。

ルカは、彼らがイエスに触れた後でさえ「喜びのあまり、まだ信じられず、ただ驚いている」と記録しています。懐疑論ではなかったのです。喜びが大きすぎたのでした。速く受け取り切れなかったのです。

彼らが出会っていたものは、それまで宇宙に存在したことの無いものでした。イエスの復活のからだは、いつかまた死ぬラザロのような蘇生した死体ではありませんでした。まったく新しいものでした。永遠の存在が組み込まれた物質的なからだです。触れることができ、本物の傷跡を持ち、食べることができ、目に見えたり見えなかったりすることができ、それでももはや死に支配されないからだです。

イエスは第二のアダムとして、新しい種類の人間性の始まりとして復活されました。イースターが旧約聖書の初穂の祭りに当たるのは偶然ではありません。パウロはその結びつきを明確にしています。イエスは「眠った人たちの初穂」です（コリント人への手紙第一 15:20）。それはまったく新しい秩序の開始でした。創られた物質が永遠へと移行した歴史上最初の瞬間だったのです。

それでも、エゴー・エイミ・アウトス。「わたし自身です。」彼らと共に歩き、教え、足を洗い、十字架で死んだ同じイエスが彼らの前に立っておられました。栄化され、変えられていますが、完全に、見まごうことなく、ご自身です。これがわたしたちの従うイエスなのです。宗教的な観念ではありません。よみがえり、臨在し、現実のお方です。

振り返り

「わたし自身です。」復活されたイエスは、あなたのために苦しみ死なれた同じイエスです。十字架につけられた主と復活された主の連続性は、あなたとイエスとの関係をどのように形作るのでしょうか。

イエスが新しい創造の初穂であることはどのような意味があるのでしょうか。イエスの復活のからだはあなた自身のからだの型であることは。

第 14 日

「すべては成就されなければならない」

「これが、わたしがまだあなたがたと一緒にいたときに話したことばです。モーセの律法と預言者たちと詩篇に、わたしについて書いてあるすべてのことは成就されなければなりませんでした」

ルカ 24:44

弟子たちはイエスに触れていました。イエスが食べるのを見ていました。疑いは喜びに変わっていました。ほとんど抱えきれないほどの喜びです。今、その喜びが落ち着くにつれ、イエスはエマオへの道でしたことをされました。聖書へと彼らを向けたのです。これはすべての復活顕現の型なのです。出会いは常に御言葉へと導くのでした。

イエスは、これが起きる前にすでに告げていたことを思い起こさせました。聖書のすべて、三つの区分にある旧約聖書全体がここを指し示していました。そしてルカはその福音書の中で最も重要な言明の一つを記録しています。「イエスは彼らの心を開いて、聖書を悟らせてくださいました。」

旧約聖書の読み方はこのようにあるべきです。それは、来られるはずのお方への統一された証言です。苦しみ、死に、よみがえり、諸国に御霊を送られる方への。イエスは聖書全体の解釈の鍵なのです。「これらの聖書はわたしについて証しするものです。」（ヨハネ 5:39）

ルカ 24:45-49 には新約聖書の中で最も圧縮された要約の一つが含まれています。イエスは贖いの全計画を三位一体の枠組みで描きました。父の計画、すなわちメシアは苦しみと復活を通して贖いを成し遂げるといふこと。御子の御業、すなわち成し遂げられ今や宣べ伝えられるべきこと。御霊の力、すなわち約束され、まもなく与えられ、後に続くすべてのことに必要なもの。

その賭けは莫大なものです。全世界が赦されることがあります。あるいはイエスの民がこのメッセージを運ばなければ、赦されないままになる可能性があります。これが御霊が選択肢ではない理由です。成し遂げられた贖いと宣べ伝えられた贖いは意図的に結びつけられています。一方が他方なしでは不完全なのです。

イエスは今も聖書を悟らせるために心を開いてくださるのです。イエスが約束し注がれた同じ御霊が、神の御言葉全体を取り上げて、それを明るく輝かせ、あきらかにイエスを指し示します。これが聖書の読み方として意図されているものなのです。復活の目で、すべてを成就された方によって開かれた目で読むのです。

振り返り

イエスは弟子たちの心を開いて、聖書のすべてがイエスを指し示すことを見えるようにされました。旧約聖書の中でイエスと結びついていないように思える部分がありますか。その結びつきを見えるようにして下さるよう、御霊に求めましょう。

旧約聖書の全体、律法と預言者と詩篇がイエスにおいて成就されました。聖書全体をキリストを指し示すものとして読むことは、あなたが聖書を読む方法をどのように変えるでしょうか。

第 15 日

「御子が遣わされたように遣わされる」

「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」

ヨハネ 20:21

弟子たちの心はちょうど聖書を悟るために開かれたところでした。今、彼らの使命が定義されようとしていました。イエスはもう一度「あなたがたに平和があるように」と言われました。繰り返しは意図的でした。最初の平和は彼らの恐れを鎮め、イエスの臨在の現実を確立しました。二番目は後に続くことの基盤となりました。使命です。

これらのことばは弟子たちをイエスご自身の遣わしに直接結びつけました。父は御子を世に遣わされました。目的をもって、権威をもって、遣わした方の全面的な支持をもって。今、復活されたイエスは弟子たちをまさに同じ方法で遣わしておられました。使命は同じでした。その背後にある権威は同じでした。遣わしの型も同じだったのです。

この使命はその後の出現で繰り返され展開されていきます。十二回の復活顕現のうち半数以上がその何らかの要素を含んでいました。それが復活後の四十日間のイエスの中心的な関心事であったことは明らかです。イエスが成し遂げた御業は世のすべての人に忠実に伝えられなければならない、そうでなければ諸国の中でその目的は実現されないのです。

使命は出会いの前には来ませんでした。出会いの後に来ました。平和の後、臨在の後、聖書の後、よみがえったからだの証拠の後に。弟子たちは復活された主の臨在から遣わされ、イエスの平和に根ざし、御言葉に錨を降ろし、イエスの喜びに満たされていました。

これは今も変わらぬ型です。わたしたちはイエスをそこでを見つけるために世に遣わされるのではありません。イエスとの出会いから、受け取ったものを携えて遣わされるのです。宣教は臨在から流れ出るのです。わたしたちはイエスの傷跡を見て、御言葉を聞き、平和を受けた者として遣わされます。イエスは今も遣わし続けておられます。使命は完成していないのです。あらゆる世代の弟子たちが、「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」ということばの中に含まれているのです。

振り返り

イエスは弟子たちを父がイエスを遣わしたように遣わされました。目的をもって、権威をもって、全面的な支持をもって。復活されたイエスによって遣わされていると理解することは、あなたが日々の生活と人間関係に向き合う方法をどのように変えるでしょうか。

使命は出会いの後に来ました。平和の後、傷跡の後、食事の後、聖書の後。あなたの使命感は生けるイエスとの生きた関係に根ざしているでしょうか。あるいはその源から切り離されてしまっているでしょうか。

第 16 日

「息を吹きかけられた」

「聖霊を受けなさい」

ヨハネ 20:22

今イエスはもう一つのことをされました。他のすべてを可能にすることです。イエスは彼らに息を吹きかけられました。

「聖霊を受けなさい。あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦されます。だれかの罪をそのままにするなら、そのままになります。」（ヨハネ 20:22-23）息を吹きかける行為は創造そのものの重みを帯びています。創世記 2 章で、神は塵から形造った人の鼻に息を吹き込まれ、人は生きる者となりました。今、復活されたイエスは弟子たちに息を吹きかけ、御霊を与えられました。それは新しい創造の瞬間だったのです。イエスの死と復活によって可能となった新しい人間性の始まりでした。

これはペンテコステに来る御霊の完全で公の注ぎとはまだ違いました。それは五十日後に、力と火と激しい風の音をもって来ます。これは新しい時代の最初の息、公の注ぎが全員に来る前に、中心的なグループに個人的に与えられた先味と約束でした。

イエスがこの賜物とともに与えた権威は重大なものです。イエスを通しての罪の赦しの宣言は非常に強力で、人々を神の家族へと導くこともできれば、神を拒絶する状態に留まることを確認することもできます。これは恣意的に行使される力ではありません。世界に和解のことばを運ぶ責任です。人々が信じる時、罪は赦されるのです。拒絶するとき、罪はそのまま残るのです。福音のことばはそれほど強力なのです。

それゆえ御霊の力は選択肢ではありませんでした。命令でした。イエスは弟子たちに御霊を受けるよう命じました。なぜなら彼らを遣わしている使命は、御霊なしには不可能だからです。すべての国の人々を弟子とすることは人間の力では成し遂げられません。御霊のみが与えることのできる力を必要としています。同じ御霊が今日のすべての信者に与えられています。わたしたちは自分の資源をもって遣わされるものではありません。復活されたイエスの息をもって遣わされるのです。

振り返り

イエスは弟子たちに御霊を受けるよう命じました。自動的なことではなく、積極的に受け取ることを必要としていました。あなたはイエスが命じ約束された御霊の満たしの中に生きているのでしょうか。今日よりいっそう完全に受け取るとはどのようなことでしょうか。

イエスを通しての罪の赦しの宣言は、罪を赦すか、あるいは人々をその中に留めるかの力を持っています。あなたの周りの人々にこのメッセージを運ぶ責任をどれほど真剣に受け止めているでしょうか。

第 17 日…第 5 回復活顕現（続き）

「力を着せていただくまで」

「見よ、わたしは、わたしの父の約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、上からの力を着せられるまでは、この都にとどまっていなさい」

ルカ 24:49

扉はまだ鍵がかかっていました。夕方はまだ若かった。しかしその部屋はもはや朝のその部屋と同じではありませんでした。

一日のうちに、神が最初の人間に命の息を吹き込まれて以来最も非凡な日に、すべてが変わっていました。新しい創造が世界に入ってきました。第二のアダムが墓からよみがえり、よみがえることによって新しい人間の家族を始めました。イエスは五度弟子たちに現れ、彼らの恐れに平和を語り、聖書を悟るために彼らの心を開き、傷跡を見せ、共に食事をし、御霊を吹きかけ、御言葉を世に運ぶよう使命を与えられました。今、夕方が近づく中で、イエスは最後のことばを与えられました。

待ちなさい。

イエスはちょうど弟子たちに息を吹きかけて「御霊を受けなさい」と言われていました。その賜物は現実でした。新しい時代の先味、最初の息でした。しかしもっと来るものがありました。上の部屋の個人的な賜物はまだ完全な注ぎではありませんでした。それには、父の約束がその満たしにおいて来るまで、つまり上からの力を着せていただくまで、エルサレムで待つ必要がありました。

イエスが選ばれたことばは生き生きとしています。備えられるのでもなく、助けられるのでもなく、着せていただく。家から出るときに誰も服を着ないで出かけないように、いかなる弟子も御霊の力を着せていただくかずに世に出てはなりません。服は保護します。服は身元を示します。御霊の力は彼らを保護するもの、そして復活されたイエスの証人としての彼らの身元を示すものの両方となるのです。それはイエスのものとして彼らを明白に印付けます。

力を表すギリシア語はデュナミスです。ダイナマイトの突然の爆発力ではなく、長期にわたって効果的に機能する持続的な能力です。これはイエスを死からよみがえらせ、三年間の宣教、いやし、教え、最終的には十字架を通してイエスを支えたのと同じ力でした。イエスはこの力が何をなし得るかを精確にご存じでした。そして弟子たちがそれなしではやっていけないことも。使命は現実でした。世界は待っていました。しかし秩序は交渉の余地のないものだったのです。まず、着せていただく。それから、行く。

振り返り

イースターの日曜日は行くようにという命令ではなく、待つようにという命令で終わりました。使命を試みる前に力を受けるために。あなたが御霊の装いなしに、自分の力で復活されたイエスに仕えようとしている方法はあるでしょうか。

イエスを死からよみがえらせたのと同じデュナミスが、すべての弟子に約束されている力です。今日あなたがその力にもっと完全に依存するとはどのようなことでしょうか。

第一部のまとめ

復活による方向転換

弟子たちには根本的な方向転換が必要でした。三年間、彼らは目に見える肉体的なからだのイエスを知っていました。今や、復活し栄化されたからだにおいて、イエスは依然として完全に臨在しておられました。しかしもはや彼らの目に見えるものに縛られてはいませんでした。現れたり消えたりすることを通じて、イエスは弟子たちに本質的なことを教えました。イエスの臨在は、見えていても見えていなくても完全に現実だということです。ある意味で、これは新しいことではありませんでした。父は常に臨在しておられましたが、目には見えませんでした。御霊は常に臨在しておられましたが、目には見えませんでした。今、復活されたイエスは弟子たちをその同じ現実の中に方向転換させました。常に見ることができるとは限らない臨在を信頼することを学ぶことなのです。イエスは御霊を通して常に民と共におられる新しい契約の時代のために、彼らを備えられたのです。

第二部

回復

イースターの五回の出現を通じて、イエスは弟子たちを新しい復活の臨在へと方向転換させることで、彼らの回復を始めておられたのです。しかし二人の使徒にはさらなる回復が必要でした。トマスはイースターの夜に他の弟子たちと一緒にいなかったため、信仰において遅れをとっていたのです。ペテロは否定によって損なわれた指導者としての責任に、公に回復される必要があったのです。第六と第七の復活顕現がその両方を成し遂げたのです。彼らの回復は例外ではありません。それはあらゆる世代において、苦しみ失敗する弟子たちを復活されたイエスが回復される型を示しているのです。

第18日…第6回復活顕現

「疑うことをやめなさい」

「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」

ヨハネ 20:27

トマスはイースターの夜に弟子たちにイエスが現れたとき、その場にいなかったのです。丸一週間、弟子たちの証言に耳を傾けていたのです。「わたしたちは主を見た。」そして丸一週間、自分を引き留め続けていたのです。

「わたしは、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れて、わたしの手を彼の脇腹に入れてみなければ、決して信じません。」

トマスはすべてか無かという性格の人物でした。あらゆる希望をイエスに賭けていたのです。イエスがラザロをよみがえらせるためにベタニアへ向かっておられたとき、それが命取りになるかもしれないとわかっていながら、「わたしたちも行って、主と一緒に死のうではないか」と言ったのはトマスでした。すべてを危険にさらす覚悟があったのです。しかしイエスの苦しみと死の様相が、トマスの信仰を打ち砕いてしまったのでした。

一週間後、イエスは再び来られました。扉はまだ鍵がかかっていたのです。イエスは彼らの真ん中に現れ、「あなたがたに平和があるように」と言われたのです。それからトマスに直接向かわれました。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。あなたの手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」(ヨハネ 20:27)「信じない者になるな」という命令は重要なのです。トマスは生まれつきの懐疑論者ではなかったのです。すべてか無かの弟子であり、もう一つの壊滅的な失敗を負う余裕のない、深く傷ついた人物でした。イエスはこれを見抜き、トマスのために特別に来られたのです。

トマスはすべての福音書の中で最も強力なイエス・キリストの神性の告白をもって応じたのです。「わたしの主、わたしの神よ。」トマスはイエスを YHWH、主と呼び、ご自分の神と、面と向かって告白したのです。

イエスは答えられました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる者は幸いです。」これはそれ以来、あらゆる世代の弟子たちに与えられた特別な祝福なのです。復活されたイエスを物理的な目を見たことはないが、イエスのことば、聖書の証言とその提示する証拠を信じた者たちへの祝福です。イエスはわたしたちすべてに命じます。自分を引き留めることをやめなさい。信じなさいと命じられるのです。

振り返り

トマスは満たされない期待によって深く傷ついていたため、信じることから自分を引き留めていました。あなたがイエスへの完全な献身から自分を引き留めている方法はあるでしょうか。その抵抗を手放すためには何が必要でしょうか。

イエスは見ないで信じる者は幸いだと言われたのです。見えるしるしを待つのではなく、聖書の証言の中にあるイエスのことばを信頼しながら、今日その祝福の中に生きるとはどのようなことでしょうか。

第 19 日

「見ないで信じる者は幸いです」

「見ないで信じる者は幸いです」

ヨハネ 20:29

トマスは告白したのです。「わたしの主、わたしの神よ。」

イエスはトマスを越え、上の部屋を越え、後に続くあらゆる世代の弟子たちにまで届くことばで応じられました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる者は幸いです。」なぜトマスの経験はそれほど重要なのでしょうか。わたしたちが信じる前にイエスの物理的な出現を求めるべきだからではありません。むしろ正反対なのです。聖書と、トマスがすでに目にしていた歴史的証拠は、彼の信仰を正当化するのに十分でした。復活の真理は、すべての人を納得させるに十分なのです。

それからヨハネは自分のことばを加えています。「イエスは、この書に書かれていないしるしを、弟子たちの前でほかにも多く行われた。しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるためであり、また信じて、イエスの名によっていのちを得るためである。」

ヨハネの福音書はわたしたちのために書かれたのです。復活されたイエスを物理的な目で見るとはなかったが、見た者たちの証言を読む者のために。ヨハネがこれらの特定のしるしと出現を選んだのは、それらが十分だからです。トマスが行ったのと同じ告白を生み出すのに十分なのです。信仰を生み出すのに十分であり、信仰は永遠に続く神の質の命、すなわちイエスの復活の命を生み出すのです。

この祝福は受動的ではありません。見ないで信じることは、臨在しているが目に見えず、語っているが通常の意味では聞こえず、働いているが目には見えない主への、積極的で日々の方向付けを必要とするのです。それは信頼の訓練の場です。わたしたちが感覚で確かめられることではなく、イエスが言われたことに基づいて行動することを選ぶたびに、わたしたちはトマスがまだ受け取ることのできなかつた祝福の中に生きているのです。復活の世代の後に来た弟子たち、イエスの傷跡に触れることも、岸辺で朝食を共にすることもなかった弟子たちは、不利な立場にあるわけではありません。イエスが特別に幸いと宣言された者たちなのです。

イエスを見ないながらも、そのことばを信じ、その臨在を経験することが、イエスが御自身の死によって始めようとされた新しい契約の関係なのです。復活されたイエスとの関係に今費やされるすべての瞬間は、顔と顔を合わせてイエスを見るとき、意味と栄光の中で幾倍にもなるのです。暗闇の中での信頼のすべての行為、すべての祈り、すべての従順は見られ、覚えられています。見ないで信じ

る者の祝福は、トマスの後に来たすべての弟子の特権なのです。わたしたちを含む、すべての弟子の特権です。

振り返り

ヨハネはあなたが信じるために特別に福音書を書きました。あなたは個人的にあなたの中に信仰を生み出すために書かれた証言として、ヨハネの福音書を読む時間を取ったことがあるでしょうか。

イエスが「幸いな」と呼ぶ者たち、見ないで信じる者たちの中にあなたがいることは、あなたの日々の生活においてどのような意味があるでしょうか。その祝福は今日あなたの生き方をどのように形作るでしょうか。

第20日…第7回復活顕現

「舟の右側に網を打ちなさい」

「舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば、とれます」

ヨハネ 21:6

エルサレムでの出現からしばらく経っていたのです。弟子たちはイエスの指示に従いガリラヤへ戻り、そこでイエスが彼らと会うと約束されていたのです。待っている間に、ペテロは漁に行くことにしたのです。他の六人も一緒に行きました。一晩中漁をしましたが、何も取れなかったのです。

夜明け頃、イエスは岸に立っておられました。弟子たちはイエスだとわからなかったのです。百メートルほど沖に出ていたからです。イエスは呼びかけられたのです。

「子どもたちよ、何か食べ物がありますか…舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば、とれます。」（ヨハネ 21:5-6）弟子たちがそのようにすると、魚の多さに、網を引き上げることができませんでした。するとヨハネがイエスだとわかりました。「主だ！」ペテロはその言葉を聞くなり、上着をまとい湖に飛び込み、まっすぐ岸へと泳いで行きました。他の弟子たちは魚でいっぱい網を引いて、舟で岸へ向かいました。

イエスは意図的に、二人の出会いの最初の場面を再現しておられたのです。二年半前、この同じ湖のほとりで、イエスはペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネを呼ばれました。何も取れなかった夜の後の奇跡的な大漁の後に。メッセージは同じでした。わたしの恵みについて何も変わっていない。最初に真実だったことは今も真実だと。

岸に着くと、炭火が燃えていて、その上に魚が乗っており、パンもありました。イエスはすでに弟子たちのために朝食を準備されていたのです。弟子たちが探し求めたからではなく、イエスが彼らを探し求めたから、彼らを見つけて仕えることのできるその場所へと来られたのでした。

これは本物の交わりの姿でした。イエスが持つておられるすべてをわたしたちと分かち合い、わたしたちの生活のすべてをわたしたちと共に分かち合うというものです。イエスは死なれる前夜に弟子たちの足を洗われました。今はよみがえった後に弟子たちの朝食を作られました。愛は仕え、決して止まらないのです。

振り返り

イエスは弟子たちの最初の召しの場面を再現して、御自身の恵みについて何も変わっていないことを示されました。あなた自身のイエスとの関係の基盤にあった恵みについて、今日何を思い起こさせていただく必要があるでしょうか。

イエスはわたしたちと交わるためによみがえられ、決して求めることをやめられません。今日あなたは復活されたイエスとの交わりをどのように育て、深めるでしょうか。

第 21 日…第 7 回復活顕現（続き）

「復活の主との朝食」

「さあ、来て、朝の食事をしなさい」

ヨハネ 21:12

網はいっぱいでした。男たちは網を岸に引き上げました。百五十三匹の大きな魚で、網は破れていませんでした。この奇跡にはイエスの署名が随所に書かれていたのです。ヨハネは岸辺でイエスをはつきり見る前から、この奇跡によってイエスだとわかったのです。

イエスは来て、パンを取って彼らに与え、同じように魚もお与えになりました。復活の主によって準備され、イエスご自身の手によって給仕された食事でした。生涯をかけて漁をしてきたこの海のほとりで、七人の疲れた漁師たちに。

この場面の交わりは印象的なのです。イエスはご自身の魚とパンを持ってきて、ご自身が起こした炭火の上で料理されました。それでもイエスは、弟子たちのために奇跡的に備えた魚の一部を恵み深く加えられました。これはラオデキアの教会へのイエスご自身のことばの姿でした。六十年後に語られたことばです。「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」

弟子たちが決して忘れることのできない食事だったのです。

この第七の復活顕現は十二回の中で最も長いものでした。ヨハネによる記録で二十四節にわたります。そしてヨハネはその前半をまるまるこれに費やしました。浜辺の焚き火、パンと魚、そして座って食べるようにという招きに。朝食があったのです。

復活されたイエスは主であり救い主であり、民を全世界へと遣わす方であるだけではありません。食卓を整え、食事を給仕し、「来なさい。食べなさい。わたしと一緒に座りなさい。一緒に分かち合いましょう」と言われる方なのです。昇天に至るまでの十回の復活顕現のうち四回に、イエスが弟子たちと食事の交わりをされたことが含まれています。それがイエスのあり方なのです。

使命についてだけではありません。これについてでもあるのです。イエスの臨在、イエスの備え、イエスに属する人々への急がない愛について。

振り返り

イエスはわたしたちと永遠に交わるためによみがえられました。単にわたしたちを愛しておられるからです。今日イエスとの交わりをより完全に受け取り、楽しむとはどのようなことでしょうか。宗教的な営みとしてではなく、本物の関係として。

使命の前に食事がありました。召しの前に気遣いがありました。この場面の順序は、イエスとのあなた自身の関係と、あなたの人生へのイエスの召しをどのように理解するかを形作るのでしょうか。

第 22 日…第 7 回復活顕現（続き）

「あなたはわたしを愛していますか」

「ヨハネの子シモン、あなたはこれらの者たち以上にわたしを愛していますか」

ヨハネ 21:15

食事が終わると、イエスはペテロに向かわれました。続いたのは十二回の復活顕現のどれよりも個人的なやり取りでした。すべての核心へと真っすぐ向かう、三度の問いです。

イエスはペテロのフルネームを使われました。イエスがペテロに与えた名前、岩という意味の名前ではなく、元の名前でした。シモン、ヨハネの子。優しく、探るような呼びかけでした。そしてその問いはすぐに中心へと向かいました。あなたはわたしを愛していますか。

「これらの者たち以上に」という言葉には特定のこだまがありました。最後の晩餐の夜に、ペテロは自信をもって宣言していました。「たとえ全部の者があなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません。」ペテロは他の者たちより優れた愛を主張していたのです。間違っていました。同じ夜に三度イエスを否定してしまいました。今イエスは尋ねました。「あなたはこれらの者たち以上にわたしを愛していますか。」この問いは叱責ではありませんでした。正直な自己認識への招きだったのです。

ペテロは慎重に答えました。「はい、主よ。わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです。」以前の自分より優れた献身の主張を繰り返しませんでした。代わりにイエスがすでに知っておられることに訴えました。もはや他の者たちと自分を比べることはなく、ただ主のお心に何があるかを告げたのです。

イエスは答えられたのです。「わたしの子羊を飼いなさい。」

これがイエスによる宣教の核心なのです。わたしたちはイエスへの愛の表れとして主に仕えるのです。そうでなければ仕えることには何の価値もありません。パウロはコリント人への手紙第一 13 章で同じことを言っています。愛がなければ、最も強力な賜物と犠牲的な行為でさえ、何の意味もないと。宣教の主な動機は人々の必要ではなく、その人々のために御自身を与えてくださった神への愛なのです。すべてはそこから流れ出るのです。

今やそれが公に、他の弟子たちの前で起きていました。イエスはただペテロを赦しておられたのではなく、ペテロを復職させておられたのです。最も公に失敗した者が最も公に回復されたのです。イエスの恵みは徹底的なのです。

振り返り

イエスはペテロに宣教の責任を与える前に、ペテロがイエスを愛しているかどうかを尋ねました。今日あなたは同じ問いにどれほど正直に答えることができるでしょうか。あなたの日々の生活はその答えについて何を明らかにしているでしょうか。

ペテロは他の者たちと自分を比べることをやめ、ただイエスが御自身の心について知っておられることに訴えました。今日あなたのイエスとの関係に同じ正直さをもたらすとはどのようなことでしょうか。

第23日…第7回復活顕現（続き）

「わたしの小羊を養いなさい」

「わたしの小羊を養い続けなさい」

ヨハネ 21:15

三度ペテロはイエスを否定しました。三度イエスは今ペテロに愛を宣言する機会を与えられました。そして三度イエスはその宣言に命令をもって応じました。「わたしの小羊を養いなさい。わたしの羊の世話をしなさい。わたしの羊を養いなさい。」

三つの構造は意図的なものだったのです。ペテロは三度イエスを否定しました。大祭司の庭で、炭火の前で。今や別の炭火のそばで、ガリラヤ湖のほとりで、イエスはペテロに三度愛を確認する機会を与えられました。各確認は使命をもって迎えられました。否定は単に赦されたのではなく、逆転させられたのです。失敗の正確な形が回復の正確な形となったのです。

これらはペテロの小羊でも羊でもありませんでした。イエスのものなのです。ペテロは自分の宣教を築くことを委ねられていたわけではありません。別の方に代わって群れに仕えることを委ねられていたのです。羊を所有しておられるのはイエスです。羊の世話をするのはペテロが、その主の名によって、主のことばによって行うのでした。

イエスはペテロに羊を養うよう命じました。何をもって養うのでしょうか。イエスのことばをもってです。神の民はしもべたちを通じてイエスのことばを聞く必要があるのです。説教者自身の考えや経験から生まれるメッセージではなく、良い羊飼いご自身のことばが、イエスご自身の群れに忠実に給仕されることが必要なのです。神への愛と神の民への愛は、牧師・教師が彼らにイエスのことばをもたらすことを常に意味するのです。

この使命は愛についての問いから直接生まれるものです。イエスはまず心について尋ねることで、宣教の心に到達されます。イエスへの愛に根ざしていない宣教はパフォーマンスになり、職業になり、重荷になるのです。その愛から流れ出るとき、それは喜びになります。羊を養うことはその愛を表す方法の一つだからです。

振り返り

イエスはペテロの失敗の形を回復の形で逆転させました。三度の否定が三度の使命をもって答えられました。イエスが特定の目的のために贖い取っておられる、あなた自身の人生の中の特定の失敗はあるのでしょうか。

羊はわたしたちのものではなく、イエスのものです。自分の宣教の建設者としてではなく、イエスご自身の群れのしもべとして自分を理解することは、他者に仕えるあなたのあり方をどのように変えるでしょうか。

第24日…第7回復活顕現（続き）

「本当にわたしを愛していますか」

「ヨハネの子シモン、あなたはわたしを愛していますか」

ヨハネ 21:17

三度目にイエスが問われたとき、愛に使う言葉を変えられました。最初の二度は、ペテロが無条件の自己犠牲的な愛でイエスを愛しているかどうかを尋ねられました。三度目は、兄弟愛を表す言葉を使われました。そしてペテロは悲しくなったのです。

まるでイエスが「あなたは自分が言うように本当にわたしを愛しているのですか」と尋ねておられるようでした。

ペテロの答えは、福音書のどの場面でも彼が語った中で最も正直なものでした。「主よ、あなたはすべてのことをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、あなたがわかっています。」

否定の前、ペテロはイエスへの愛について大きな自信をもって語っていました。「たとい、あなたとともに死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」自分の心の中にあるものを確信していました。今は確信がありませんでした。だから愛を宣言する代わりに、自分よりも自分をよく知っておられる方に訴えたのです。

「主よ、あなたはすべてのことをご存じです。」これは回避ではなかったのです。最も深い種類の正直さだったのです。神への愛についてわたしたちが語る事が重要なわけではありません。誰でも神を最高に愛していると主張することができます。重要なのは神がわたしたちについてすべてを知っておられるという事実なのです。わたしたちを完全に知りながら、それでも無条件に愛することを選ばれます。神のわたしたちへの知識は脅威ではなく、わたしたちの安全なのです。ペテロは自分自身の自己評価にではなく、イエスご自身の知識と恵みの上に、イエスへの愛を置いていたのです。

神を愛するわたしたちの能力自体が、わたしたち自身の力ではなく、神の恵みの産物なのです。神のわたしたちへの先行する愛の中に留まることが、神を愛し返す秘訣なのです。

振り返り

ペテロは感じていることを主張することをやめ、ただイエスが知っておられることに訴えました。イエスとの関係の中で、自己確信的な宣言からイエスの知識と恵みへの正直な依存へと移る必要のある分野はあるでしょうか。

「主よ、あなたはすべてのことをご存じです。」イエスがあなたの失敗も含めてあなたを完全に知り、それでもあなたを愛しておられるという事実は、今日あなたがイエスに近づく方法をどのように変えるでしょうか。

第 25 日…第 7 回復活顕現（続き）

「あなたが若かったころ」

「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたが若かったときは、自分で帯を締めて、自分の行きたいところを歩きました。しかし年をとると、あなたは両手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をして、あなたの行きたくないところへ連れて行きます」

ヨハネ 21:18

イエスは予期しないことを言われたのです。ペテロがどのように死ぬかについて語られたのです。

ヨハネは編集上の注記を加えています。「イエスは、ペテロがどのような死に方で神の栄光を現すかを示して、こう言われたのであった。」ペテロは殉教者として、選ばない死へと他者に導かれ、十字架にかけられて死ぬことになるのです。キリスト教の伝統によれば、ペテロは主と同じ姿勢で死ぬ価値はないとして、逆さ十字架を求めたとされています。

なぜイエスはペテロにこのことを告げたのでしょうか。それは回復の一部であり、使命の一部でもあったのです。ペテロがイエスとの関係において若い、あるいは未熟であったとき、ペテロは自己主導で自己依存的でした。行きたいところへ行きました。自分の力を信頼していました。その自己依存は今や打ち砕かれていたのです。

成熟するにつれ、御霊はペテロの自己意志を克服し、イエスが選ばれるところへ、最終的には死へと導かれることとなります。これは脅しではありませんでした。変革の約束だったのです。大祭司の庭でひとりの女中の問いかけから逃げた者が、いつの日か喜んで死に向かい、御霊に導かれ、神を栄光あらしめる死を死ぬことになるのです。彼の人生の軌跡は敗北ではなく、復活だったのです。

信仰において若いとき、わたしたちは主に自己主導です。都合がよいときにイエスに従い、代償が大きすぎるときに引き下がります。成熟するにつれ、御霊はわたしたちの意志をますます把握し、わたしたちが自然には行かないところへと導くのです。

倒れた自己依存的なペテロは、失敗と回復を通じて、「神に従わなければなりません」とサンヘドリンの前に立つ御霊に導かれたペテロへと変えられていったのです。イエスは最初からペテロのすべてをご覧になっていました。わたしたちの中にも同じ軌跡を見ておられるのです。

振り返り

イエスはペテロに、弟子としての成熟は自然には行かないところへ導かれることを意味すると告げました。御霊が今あなた自身では選ばないどこかへとあなたを導いておられる人生の分野はどこでしょうか。

自己依存的なペテロは失敗と回復を通じて御霊に導かれたペテロになりました。あなた自身の失敗と回復の経験は、自分自身ではなくイエスに依存することへの成長にどのように貢献したでしょうか。

第 26 日…第 7 回復活顕現（続き）

「わたしに従いなさい」

「わたしに従い続けなさい」

ヨハネ 21:19、22

二年半前、ペテロを湖のほとりで最初に呼ばれたのと同じ命令でした。すべてが一周して戻ってきたのです。奇跡的な大漁は最初の召しの場면을再現しました。朝食は交わりを新たにしました。三度の問いと使命は、ペテロを任命された立場へと回復させました。そして今、そのすべての基盤が再確認されました。「わたしに従い続けなさい。」

ペテロはよみがえりの後、かつてのようにイエスを定期的に目で見ることができなかったのです。しかしイエスの臨在の中に生き、人生のすべてをイエスの模範と御心に合わせていくというその過程は続くのです。今や聖なる御霊の力によって。

イエスとの関係とは、規則や宗教的規律に従うことではありません。御言葉を通したイエスのご性格、価値観、変わらない臨在の絶え間ない影響の下にあることなのです。日々、普通のことの中でも非凡なことの中でも、明確さの中でも混乱の中でも。これがその形なのです。

しかしペテロはすでに他のところを見ていました。振り返るとヨハネが彼らの後をついて来ているのを見て、尋ねました。「主よ、この人はどうなるのですか。」

イエスは率直でした。「もしわたしが来るまで彼を生かしておきたいとしても、あなたには何の関係がありますか。あなたは、わたしに従いなさい。」

ペテロは使命を与えられたその瞬間に、別の弟子と自分を比べ始めました。ヨハネの召しはペテロの問題ではありませんでした。ペテロの召しはイエスに従うことであり、イエスが他の誰にどう接しておられるかを監視することではなかったのです。

この短いやり取りはミニチュアのキリスト者の生涯です。わたしたちは命令を与えられます。わたしたちは気が散るのです。イエスは命令を繰り返されます。わたしたちは焦点を取り戻すのです。成熟するほど、気が散る時間は短くなります。しかしこの地上でその過程は決して終わらないのです。絶え間ない繰り返しは失敗のしるしではありません。それが弟子としての形なのです。「わたしに従い続けなさい。」それは最初の命令です。それは最後の命令です。それが関係のすべてなのです。

振り返り

イエスはたった今完全に回復したばかりの弟子に、基本的な命令「わたしに従え」を繰り返されました。これは弟子としての性質について何を語っているのでしょうか。最も成熟した弟子でさえ、この基本的な召しを聞き続け、従い続ける必要があるということについて。

ペテロはすぐに自分の召しをヨハネの召しと比べ始めました。あなた自身の人生の中で、自分の召しを他の誰かの召しと比べる傾向が最も強いのはどこでしょうか。そしてペテロへのイエスのことばはそれにどのように語りかけるのでしょうか。

第二部のまとめ：回復

トマスは信仰に戻りました。ペテロは指導者の立場に回復されました。復活されたイエスはイエスにしかできないことをされました。それぞれの失敗の中に入り込み、それを逆転させたのです。使徒たちが再び全きものとされると、イエスは前へと進まれることができました。次の出現は、イースターの夜に始めたことを完成させることになります。それを担うために再建された弟子たちに、その満ちた形で与えられる大宣教命令となるのです。

第三部

権威と使命

最初の七回の復活顕現は明確な時系列に沿っています。残りの出現は福音書の中で同じ順序では提示されていません。厳密な時系列ではなく、論理的な流れに沿って、それらを見ていくのです。

イエスは最初の七回の出現を通じて、弟子たちを方向転換させ、回復へと導いてこられたのです。今や、ガリラヤのイエスが指定された山での第八の出現において、イエスは時の終わりにこの地上に最終的に戻られるまで、弟子たちへの使命を定める大命令を与えられたのです。これらのことばは最初に聞いた者たちと同様、今日のわたしたちにも直接関わっているのです。人類の歴史を変えたイエスのこの復活のことばを、時間をかけて深く受け取っていくのです。

第 27 日…第 8 回復活顕現

「天においても地においても、いっさいの権威が」

「わたしには天においても地においても、いっさいの権威が与えられています」

マタイ 28:18

十一人の弟子たちはガリラヤへ、イエスが指示された山へと出かけました。イエスを見ると、彼らはイエスを礼拝したのです。もっとも、遠くにいるその方が本当にイエスなのかについて、疑う者もいたのです。イエスは彼らの礼拝に応じて彼らに近づき、それから語られました。いつもそうなのです。神の民が目に見えない復活の臨在を礼拝するとき、イエスは近づいて、聞き従う心にそのことばを語られるのです。

この場面は預言者ダニエルが見た「人の子」の幻の成就を始めるものなのです。「わたしが夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られた。その方は年老いた方のもとに進み、その前に導かれた。その方に、支配と光栄と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちが皆、その方に仕えることになった。その支配は永遠の支配で、過ぎ去ることなく、その国は滅びることがない。」(ダニエル 7:13-14)

ダニエルはすべての国民と民族がイエスを礼拝する権威を受けるイエスを見たのです。山でイエスが受けた礼拝は、その普遍的な礼拝の初穂でした。すべての国とすべての創造物が神の御座の前に集まり、「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と讃美を受けるにふさわしい方です」と歌うとき、その完成を見るのです。イエスの大命令はダニエルが見たことの始まりと、ヨハネへの黙示との橋なのです。

こうしてイエスは宣言をもって大命令を始められたのです。「わたしには天においても地においても、いっさいの権威が与えられています。」

十字架は敗北のように見えたのです。復活はそれをすべてのものの上に主として神の御子が即位した決定的な勝利として明らかにしたのです。ガリラヤの山でイエスが主張された権威は、高く上げられ、即位された、復活された神の御子の権威であり、すべての人、すべての国、過去と未来の歴史のすべての瞬間を包含する権威なのです。

この宣言が後に続くすべての根拠なのです。すべての権威がイエスに与えられているがゆえに、弟子たちはすべての国へ行かなければなりません。イエスがすべての力と支配の上に君臨しておられるがゆえに、いかなる障壁も究極的には乗り越えられないものはないのです。すべての人は、それを知っているかどうかにかかわらずイエスの御国の民であるがゆえに、御座の前で永遠にイエスを礼拝できるよう、自分たちの王のメッセージを聞く権利があるのです。

振り返り

イエスは弟子たちを世に遣わす根拠として、天においても地においてもいっさいの権威を主張されました。その権威はあなた自身の日々の生活における人々と状況へのあなたの向き合い方をどのように変えるでしょうか。

弟子たちは大命令を受ける前に礼拝しました。礼拝、すなわちイエスが本当に誰であることを認めることは、どのようにしてあなたがイエスの召しに生きるための備えとなるでしょうか。

第 28 日…第 8 回復活顕現（続き）

「すべての国の人々を弟子としなさい」

「それゆえ、わたしはあなたがたに命じます。すべての国の人々を弟子としなさい」

マタイ 28:19

根拠が示されていたのです。すべての権威はイエスのものです。今やそこから流れ出る中心的な命令が来たのです。「すべての国の人々を弟子としなさい。」

イエスがすべての主であるがゆえに、すべての生きている人がイエスへの礼拝と従順を負っているのです。このメッセージはすべての国、民族集団、世界のすべての人に、それぞれの言語で伝えられなければなりません。王の栄光を真に知り、イエスだけが受けるにふさわしい、信仰による愛の従順を捧げることができるように。大命令は専門的な宣教師の階級に向けられたものではありません。あらゆる世代のイエスのすべての弟子に向けられているのです。

「弟子」ということばが鍵なのです。イエスは従者たちに改宗者、教会員、宗教的信奉者を作ること委ねられたものではありませんでした。弟子を作ること委ねられたのです。イエスの継続的な権威と教えのもとで生きることを学んでいる人々、イエスの似姿に形成されつつある人々、そして自らも同じ命を他者の中に再現している人々を作ることです。弟子とは単に祈りを祈ったり、一連の信念に同意したりした人のことではありません。イエスに従い、イエスによって変えられ、イエスを知らせている人のことなのです。

その範囲は息を呑むほど広大です。すべての国、ギリシア語でパンタ・タ・エスネー、すべての民です。世界の政治的な国々だけでなく、あらゆる民族的、言語的、文化的集団を指しているのです。イエスは神のスケールの展望を持っておられました。イエスの力と臨在以外のいかなる資源もなく、地上のすべての民族集団に届くよう五百人を任命しておられたのです。二千年以上経った今も、その使命は未完のままです。あらゆる世代の弟子たちがこの大命令を新たに受け継ぐのです。

イエスの復活顕現の半数以上がこの大命令の何らかの要素を含んでいたのです。復活後の四十日間のイエスの宣教における中心的な関心事であったことは明らかなのです。イエスが御自身の死と復活を通じて成し遂げた御業は、世のすべての人に忠実に伝えられなければなりません。そうでなければ諸国の中でその目的は実現されないのです。

振り返り

イエスは特別な少数の者だけでなく、すべての弟子に、すべての国の人々を弟子とするよう命じました。神があなたを置かれた場所で、あなたのその大命令における部分は何でしょうか。

その定義によれば、すなわちイエスに従い、イエスによって変えられ、イエスを知らせているということによれば、あなたは弟子でしょうか。あなたは弟子を作っているでしょうか。

第 29 日…第 8 回復活顕現（続き）

「行き続けなさい」

「行き続けながら…」

マタイ 28:19

大命令の中心的な命令、すべての国の人々を弟子としなさいという命令は、それがどのように従われるべきかを描写する三つの副次命令を伴っていたのです。三つはすべて継続的で進行中の行動で表現されているのです。第一は「行き続けながら…」です。

「行く」ということばは継続的な行動の分詞です。行き続けながら、行くにあたってという意味です。「教会に来る」種類のものだけでは不十分なのです。「彼らのところへ行き、知らせる」種類のものでなければなりません。あらゆる言語的、文化的、宗教的、社会的、地理的、経済的な障壁が、わたしたちが行くことによって乗り越えられなければならないのです。福音は世界が来るのを待つものではないのです。福音が世界へと行くのです。

イエスご自身が宣教全体を通じてこれを模範として示されたのです。イエスはガリラヤへ、サマリアへ、ティルスとシドンのユダヤ人以外の地域へと行かれました。その時代のあらゆる社会的宗教的境界を越えられました。取税人や罪人と食事をされました。サマリアの女たちやローマの百人隊長に語りかけられました。らい病人に触れ、会堂司の死んだ娘をよみがえらせました。イエスの宣教全体は「行く」こと、イエスを遣わした父の名において障壁を越えることでした。

使徒の働きは、この副次命令に従った弟子たちの物語なのです。御霊はピリポを荒野の道でエチオピアの役人のもとへと駆り立てたのです。コルネリオの家へとペテロを強いられました。パウロとその仲間たちをエーゲ海を越えてマケドニアへと導かれました。代償がかかり、危険で、歓迎されないことも多かったのですが、弟子たちは行き続けたのです。主が命じ、御霊が力を与えてくださったからです。

行き続けることは今も忠実な弟子としての形なのです。それはわたしたちとイエスが届くよう呼んでおられる人々の間にあるいかなる障壁も、言語の、文化の、階級の、宗教の、あるいは地理の障壁も越えることを意味するのです。天においても地においてもいっさいの権威を持つ復活されたイエスが、その権威を背後に持たせて民を遣わしておられます。わたしたちはイエスの名において、イエスの力をもって、イエスが命をもって贖われた人々のところへと行くのです。

振り返り

イエスは弟子たちに行き続けるよう、人々に届くために障壁を越えるよう命じられたのです。この命令に従うにあたって、あなたと周りの人々の間で最も越えられる必要のある障壁はどれでしょうか。

行くことは時折のことではなく、継続的なことなのです。行くという姿勢が、特別なイベントではなく、あなたの生き方になるとはどのようなことでしょうか。

第30日…第8回復活顕現（続き）

「バプテスマを受けなさい」

「…父と子と聖霊の御名によって、バプテスマを受け続けながら…」

マタイ 28:19

大命令の第二の副次命令は、行くという最初の行為から決定的な献身の行為へと移ります。「父と子と聖霊の御名によって、バプテスマを受けなさい…」

行って王なるイエスについての良い知らせを伝えるだけでは十分ではありません。応じた人々はバプテスマを受けなければなりません。イエスを主と救い主として公に個人的に献身し、神の民の共同体に迎え入れられることが必要なのです。福音はその本質上、応答を求めるものであり、イエスの弟子たちは、伝道した人々が信仰の応答を公にバプテスマによって告白するよう導かなければならないのです。

イエスが与えた定型句は福音書の中で最も明確な三位一体の宣言なのです。バプテスマは父と子と聖霊の名、単数の名において授けられるものです。一つの名。三つの位格。単なる教えや共同体の中ではなく、三位一体の神の名、性格、アイデンティティ、関係の中に浸されるのです。これが救いの意味なのです。三位一体ご自身の交わりへと導き入れられることです。

イエスは宣教を通じて、父についてイエスを遣わした方として語り続けておられました。御子として、父と同等で同永遠の御子として御自身を明らかにされました。御霊として、御自身と同じもう一人の助け主を、すべての信者の内においてイエスを表す方として約束されました。その一つの行為の中で名指しされたのです。バプテスマは三位一体の出来事なのです。父、子、御霊が永遠に分ち合う命の中への浸しであり、今や信じるすべての人に開かれているのです。

バプテスマを授けるという使命は継続的なものです。あらゆる世代の弟子たちが、復活されたイエスへの信仰の決定的で公の告白へと人々を導く責任を持っています。バプテスマを授けることをやめた教会は、弟子を作ることをやめた教会なのです。

振り返り

バプテスマは三位一体の神の名と命への浸しです。あなたは自分自身のバプテスマを、父、子、聖霊の交わりへの加入としてどれほど完全に理解しているでしょうか。

あなたは届いている人々を、バプテスマという決定的で公の献身へと導いているでしょうか。その責任をより真剣に受け止めるとはどのようなことでしょうか。

第31日…第8回復活顕現（続き）

「すべてのことを守るように教えなさい」

「…わたしがあなたがたに命じておいたことをすべて守るように、教え続けながら」

マタイ 28:20

大命令の第三の副次命令は、他の二つを持続可能にするものです。「わたしがあなたがたに命じておいたことをすべて守るように、教え続けなさい。」

行くこととバプテスマは人々を神の家族へと導き入れます。イエスが命じたすべてのことへの従順を教えることは、人々を弟子に形成するのです。本当にイエスの似姿に変えられつつある人々に。この第三の命令なしに、他の二つは持続できないのです。イエスの教えへの従順が、すべての信者の情熱的な生き方となってはじめて、教会は諸国に届くために必要な献身の深さを持つことになるのです。

範囲に注目してください。「わたしがあなたがたに命じておいたことをすべて」です。より受け入れやすい教えの選択ではありません。周囲の文化と快適に適合する命令だけでもありません。すべてなのです。

また標準にも注目してください。「守るように」です。時折の遵守ではありません。イエスの教えへの知的な同意でもありません。生涯の弟子の歩みを通じてより深く根付いていく、継続的で成長する従順の生き方なのです。目標はイエスについての情報ではなく、イエスのことばの権威の下で生きることを通じたイエスの似姿への変革なのです。

四つの福音書にはイエスの包括的なカリキュラムが含まれています。最も重要な模範、教え、約束、命令が。十二人は将来のすべての世代の弟子たちがそれを学び、従い、他者に同じことを教えることができるよう、この本質的な内容を口承と文書の形で保存するよう任命されたのです。福音書の内容を習得することへの献身は、弟子作りにおいて見落とされている決定的な要素なのです。

イエスはまさにこの目的のために十二人と千二百日以上を過ごされたのです。弟子たちがイエスの教えをしっかりと把握せずに去ることをイエスは想像することができなかつたのです。イエスは実際に語られたことにほとんど馴染みのないまま、イエスに従うと主張する現代の弟子についても同様に驚かれるでしょう。福音書のことばに日々関わることは高度な霊的修練ではありません。それはイエスを知るために不可欠なのです。この第三の副次命令は現代のキリスト教においてははるかに完成されていないのです。復活されたイエスはすべての弟子に命じます。「わたしがあなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」と。

振り返り

イエスは弟子たちに、選ばれた快適な教えへの従順ではなく、命じたすべてへの従順を教えるよう命じました。イエスの命令の中で従うことが最も難しいのはどれですか。その分野でイエスにより完全に従うためには何が必要でしょうか。

弟子としての目標は情報ではなく変革なのです。イエスの教えへのあなたの関わりは実際にあなたの生き方を変えているのでしょうか。

第 32 日…第 8 回復活顕現（続き）

「わたしはいつもあなたがたとともにいます」

「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます」

マタイ 28:20

大命令は挑戦ではなく約束で終わりました。聖書のすべての中で最も栄光ある約束の一つです。「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

「見よ」ということばは注目を要求しています。イエスは弟子たちが目に見えないご自身の臨在の中で生きることを学ぶにあたって、この真理に目を固定させたかったのです。大命令の他のすべて、権威、命令、三つの副次命令は、この基盤の上に置かれているのです。行きなさい。なぜならわたしはあなたがたとともにいるから。バプテスマを授けなさい。なぜならわたしはあなたがたとともにいるから。教えなさい。なぜならわたしはあなたがたとともにいるから。すべての国の人々を弟子としなさい。なぜなら「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいる」から。

この約束は包括的なのです。「いつも」です。時々ではなく、状況が都合よいときだけでなく、わたしたちの従順が一貫しているときだけでもなく。いつもです。開いた扉でも閉じた扉でも、実り多い季節でも不毛な季節でも。牢獄の中でも自由の中でも。健康の中でも苦しみの中でも。命の中でも死の中でも。天においても地においてもいっさいの権威を持つ復活されたイエスが、戻られるまで毎日毎瞬間、民とともにおられるのです。

マタイはその福音書をインマヌエル、神わたしたちとともにおられる、という名で始め、この約束で終えたのです。マタイの語りの全体の弧は、神が民とともにおられるために来られるという告知から、イエスの生涯、死、復活を通じて、この最後のことばへと動くのです。「わたしはいつもあなたがたとともにいます。」インマヌエルの約束は昇天によって取り消されるものではありません。それは成就され、拡張されるのです。イエスはガリラヤで弟子たちの間を歩まれていたときよりも、今や民とより一層ともにおられます。すべての信者の中に、すべての場所に、すべての世代に、御霊を通じて臨在しておられるのです。

これまでに最も不可能な使命として最も考えられない集団の人々に与えられた大命令は、これまでに語られた最も十分な約束を伴っています。大命令への従順は人間的野心の行為ではありません。「わたしはあなたがたとともにいる。いつも」と言われた方への信頼の行為なのです。

振り返り

イエスは「見よ」と言って、臨在の約束に注目を向けられたのです。イエスの絶え間ない臨在の現実、あなたが日々生き仕える方法を実際にどれほど形作っているのでしょうか。

「わたしはいつもあなたがたとともにいます」という約束は大命令の基盤です。大命令の中で最も避けたいと思う特定の側面は何ですか。そしてこの約束はその誘惑にどのように語りかけるでしょうか。

第三部のまとめ：権威と使命

大命令は今や完全に弟子たちの手に、そしてわたしたちの手に委ねられました。イエスは権威を宣言し、使命を命名し、それを遂行するための三つの命令を与え、すべてを絶えることのない臨在の約束をもって封印されたのです。何も差し控えられなかったのです。何も曖昧なままにされなかったのです。弟子たちにはただ一つのことを除いて必要なものすべてがありました。それを行う力です。その約束はまだ成就していなかったのです。第四部でイエスは、不可能を可能にする賜物を説明するために向かわれます。すでに先立って弟子たちに吹きかけられていた御霊が、今や満ちた形で注がれようとしていたのです。

第四部——約束の解き明かし

イエスは、逮捕される前の最後の時間を、弟子たちが想像することさえできなかった世界のために彼らを備えるために費やされました——肉体的には不在となるが、これまで以上に近くにいてくださる世界のために。その夜、聖霊について語られた約束は、新しい契約の時代全体を支える神学的基盤です。それらは、ペンテコステ以来すべての信者が経験してきたいのちをそのまま記述しているのです。

これらは上の部屋にいたあの人々だけに語られた言葉ではありません。わたしたちへの言葉でもあるのです。わたしたちこそ、イエスが語っていた人々——見ずに信じ、約束された御霊を受け、よみがえったイエスが御霊によって内に生きておられるとはどういうことかを内側から知る人々——なのです。その夜イエスが御霊について語られたすべての約束は果たされました。わたしたちはその成就の中に生きているのです。

よみがえったイエスは新しい神学をもたらされたわけではありません。すでに語られた言葉を、今度はその成就の光の中で照らし出してくださったのです。これがこの書全体を貫く方法——「彼が言われたことを思い出す」——でした。第四部においてその方法は特定の形をとります。復活の顕現の中でイエスは繰り返し、ご自分の死の前夜に語られた言葉に立ち返られた——弟子たちが聞きはしたが、まだ十分に受け取ることのできなかつた、聖霊についての約束へと。今、十字架と空の墓の向こう側から、それらの言葉はついに理解されるようになったのです。よみがえったイエスは、彼らに思い出すよう呼びかけていたのです。御霊ご自身の働きは、イエスが約束した「聖なる思い起こし」の働きです。「彼はあなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」次の六日間、わたしたちはイエスとその賜物を解き明かしてくださるのに耳を傾けます。

第 33 日……第 9 回復活顕現

あなたがたは聖霊に浸される

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によってバプテスマを授けられるからです。」

使徒の働き 1:4-5

これは第 9 回復活顕現であり、同時にイエスが弟子たちと共に食事をしながら顕現された四度目でもありました。四十日の復活顕現も終わりに近づいていました。今、食卓の場でイエスはすべてをひとつにまとめる命令と約束を与えられました。

バプテスマのヨハネが最初の約束をしていた。「わたしはあなたがたに水でバプテスマを授けています。しかしわたしよりも力のある方が来られます。その方はあなたがたに聖霊と火でバプテスマを授けられます。」その約束は三年以上未成就のままでした。今イエスは彼らに告げておられました——それがまさに起ころうとしているのです。あと数日で彼らはイエスの働きに見てきたのと同じ力を受けることとなります。

浸されるというイメージは重要です。水のバプテスマを受ける人がその水に完全に包まれ水の支配の下に置かれるように、イエスは弟子たちが聖霊によって完全に包まれ満たされると約束しておられた。これは部分的な注ぎではなく、霊的なグレードアップでもない——全人格が、御霊を通してよみがえったイエスの臨在と力の中へと完全に浸されることなのです。

これに伴う命令も同様に重要でした。待ちなさい。まだ行ってはならない。まだ使命を始めてはならない。エルサレムにとどまり、使命を可能にする力を待ちなさい。彼らはよみがえった主によって遣わされました。大宣教命令を聞きました。しかしイエスは待つよう命じられました。なぜなら御霊なしの使命はイエスの使命ではなく、単にその名の下に行われる人間の活動に過ぎないからです。

これは今も同じパターンです。御霊はわたしたちの働きへの付加物ではない——御霊こそがその源なのです。わたしたちが御霊への依存なしに、自分のエネルギーと才覚でイエスのためにすることはすべて、イエスが意図されていることに届きません。イエスはわたしたちに満たされるよう命じておられます。自分自身の力で行動することを止めるよう命じておられます。そしてその後、力をもって——イエスをよみがえらせたのと同じ力をもって——わたしたちを遣わされるのです。

振り返り

イエスは弟子たちに御霊を受けるまで待つよう命じられました。あなた自身の日々のいのちと働きは、自分の能力と努力への依存ではなく、聖霊への真の依存をどれほど反映しているでしょうか。

御霊に浸されるという約束は、エルサレムに集まった百二十人の弟子全員のためのものであり、使徒たちだけのものではありませんでした。あなた自身がこの約束にどのように与っているとお考えでしょうか。

第34日

わたしのような、もう一人の助け主

「わたしは父にお願いします。そうすれば父はもう一人の助け主を与えてくださいます。その方はいつまでもあなたがたとともにいてくださいます。その方は真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともにおられ、あなたがたのうちにおられるようになるからです。」

ヨハネ 14:16-17

イエスが聖霊に浸されると約束されたとき、それは弟子たちにとって神秘的なことでした。イスラエルの歴史のほとんどにおいて、御霊はわずかな人々——王、祭司、預言者——にのみ下りました。普通の信者の日々の経験ではありませんでした。弟子たちにはイエスが約束しておられることへの枠組みがありませんでした。だからこそイエスはあの夜の最後のひとときの多くを御霊の説明に費やされた——その基盤なしには、これから起こることは何も意味をなさないからです。

イエスが御霊に与えた呼び名——パラクレートス——はあまりに豊かな意味を帯びているため、どんな一つの言葉でも言い尽くせない。訳によって助け主、慰め主、カウンセラー、弁護者と訳される。しかしイエスが言われた最も注目すべきことは「わたしのような、もう一人の助け主」という言葉である。御霊は単なる力や影響力ではない——父と子と共に三位一体の神として同等の、人格を持つ神です。御霊はイエスの霊であり、イエスと同じ本質を持つ神なのです。

弟子たちは聖霊についてあまり知らなかった。しかしイエスのことは知っていた。それで十分でした。イエスは彼らに告げておられた——わたしの中に見てきたすべてのもの、助け、憐れみ、真理、力、臨在——それがあなたがたの内に住まうために来ようとしているのです、と。浸されるというイメージはここでその意味の重みをもって迫ってきます。聖霊に浸されるとは、イエスご自身の影響の下に完全に置かれることなのです。これが新約聖書で「満たされる」という言葉が意味することです。ペンテコステ以後、御霊に満たされることは弟子たちの日常的経験の標準的表現となりました——たまに起きる霊的な出来事ではなく、新しい契約のいのちの継続的な現実として。

イエスは父を表された——ご自分の主導でけっして語らず行動せず、常に父のみこころに従われた。それゆえイエスは「わたしを見た人は、父を見たのです」と言うことができた。同様に、聖霊はわたしたちに対するすべての関わりの中でイエスを表しておられる。御霊はご自分の主導で語ったり行動したりしない——御霊は今や父の右に座しておられるよみがえったイエスと、わたしたちを永遠につなぐ媒介なのです。

御霊はわたしたちの内なるイエスご自身の個人的な臨在——常に、どこにおいても、永遠に。

振り返り

イエスは御霊を「わたしのような、もう一人の助け主」と表されました。御霊を単なる神的影響力としてではなくイエスの個人的な臨在として理解することは、あなたの御霊との関わり方をどのように変えるのでしょうか。

世は御霊を見もせず知りもしないゆえに受け入れることができません。しかしイエスは「あなたがたはその方を知っています」と言われました。あなたはそうでしょうか。御霊の臨在と働きについての個人的な経験をどのように表現されますか。

第 35 日

その日、あなたがたは知る

「その日——御霊があなたがたのうちに宿るようになるその日——には、わたしが父との交わりの意識の中に生きており、あなたがたも同様にわたしのうちにあるその同じ交わりの中に生きており、わたしがあなたがたのうちに生きていることを、あなたがたは悟るようになります。」

ヨハネ 14:20

イエスはご自身のような、もう一人の助け主として御霊を約束された。今イエスはその約束の最も圧倒的な含意の一つを展開された——御霊が来ることですべての信者に現実となるものを明らかにされました。

イエスが指し示していた日はペンテコステ——エルサレムに集まった弟子たちに御霊が注がれる日——であった。その日、父との関係についてイエスが教えてきたすべてのことが、彼ら自身の生きた経験となります。単なる教義としてではなく、内なるいのちの現実として知られるようになります。

イエスが約束した知識は、その中心において三位一体的なものであった。イエスは父の内にいた——創造以前から存在していた永遠の愛と相互の内住。彼らはイエスの内にあり、イエスは彼らの内にいた——その同質の関係が、恵みによってすべての信じる者へと広げられた。御霊こそが、それを彼らの内において現実のものとし、個人的なものとし、意識されるものとする方なのであった。

御霊がイエスを表し、イエスが父を表すゆえに、聖霊の内住は三位一体の内住を意味する。わたしたちは神的影響力や霊的賜物を受けるだけではない。父と子がわたしたちのもとに来て住まわれるのです——イエスが明示的に言われたように。「だれでもわたしを愛するなら、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住まいを作ります。」わたしたちは三位一体の神の住まいなのです。

以前の日に、水のバプテスマは三位一体の神との同一化の、外的・公的な行為であることを見た。ヨハネ 14:20 はその内的な対応物である。ペンテコステは弟子たちが、バプテスマが外側から宣言することを内側から知り始める日——すなわち、ちょうどイエスご自身が常にそうであったように、三位一体の臨在の中に生きる者であると知る日——となるのであった。

この真理は十字架の前に約束され、復活によって確かめられ、ペンテコステに現実となりました。イエスを信じるすべての者に与えられている特権なのです。

振り返り

イエスは御霊が「わたしは父のうちに、あなたがたはわたしのうちに、わたしはあなたがたのうちに」という三位一体の交わりの現実を、意識された日常の経験としてくださると約束されました。あなたはその現実をどれほど実際に生きているのでしょうか。それをより十分に受け取るためには何が必要でしょうか。

内住する御霊は、父と子があなたのもとに住まいを作られたことを意味します。その真理は、あなた自身のいのち——あなたのからだ、日課、日々の決断——についての考え方をどのように変えるでしょうか。

第 36 日

御霊はあなたがたを教え、思い起こさせてくださる

「助け主、すなわち父がわたしの名において遣わされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

ヨハネ 14:26

この約束こそ、この書全体の方法を可能にするものです。

イエスは「わたしはこれらのことをあなたがたに話した」と完了時制を用いて語られました。これはある行為の結果が永続して続くことを示します。御霊について、そしてイエスの他のすべての教えについて明らかにされた真理は、色褪せたり期限切れになったりしません。よみがえった主の生ける言葉として永続的に立ち、御霊の働きはそれをわたしたちに生きたものとする事なのです。

御霊はすべてのことを教えられます——聖書に代わってではなく、聖書を通して。御霊は信者の理解を開いてイエスが言われたことの意味を、単なる知的理解を超えてつかませてくださいます。自然の心には持ち得ない霊的洞察の能力を与えてくださいます。テキストの言葉を輝かせ、確信をもってその心に深く刻んでくださいます。

御霊はまた思い起こさせてくださいます。会話の中で、決断の場で、誘惑や悲しみの瞬間に、まさに必要なときにイエスの特定の言葉を思い浮かべてくださいます。これは機械的なプロセスではありません。イエスの言葉を完全に知り、信者の必要を完全に知っているお方の、個人的で心を配った働きなのです。御霊はイエスが語られた言葉と信者が今生きているいのちをつなぐ生きたつながりです。

復活の顕現を通してイエスはまさにこのことをしてこられた——聖書を開き、ご自分が言われたことを弟子たちに思い起こさせ、すべてが成就したことを見えるようにして下さった。エマオへの道でイエスは彼らの心を開いて御言葉を理解させて下さった。御霊は今日もその同じ働きをわたしたちの内に続けておられる。これはよみがえったイエスが今も働いておられる姿——教え、思い起こさせ、照らし出し——今は傍らからではなく内から。

イエスの言葉を思い起こすことがこの書の方法であった——なぜならそれがイエスがわたしたちに約束して下さった御霊の働きだからです。御霊はわたしたちが受け取ったものだけを思い起こさせることができる。読み、学び、黙想によって御言葉がわたしたちの内に深く根付けば根付くほど、御霊はわたしたちが最も必要とする瞬間にそこからより豊かに引き出すことができる。御霊と御言葉はいつも共に働いてきた——そしてこれからも常に共に働くのです。

振り返り

御霊はイエスが言われたすべてのことを思い起こさせてくださいます——しかしわたしたちが受け取ったものだけを。あなたは聖書との定期的で真剣な関わりを通して、どれほど深くイエスの御言葉を心に植えつけているのでしょうか。

まさに必要なときに御霊がイエスの御言葉をあなたの心に思い浮かべてくださった特定の経験を思い起こすことができますか。その経験はその働きへの信頼をどのように形作りましたか。

第 37 日

わたしが去って行くことは、あなたがたの益になる

「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。わたしが去って行かなければ、助け主はあなたがたのところに来ません。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。」

ヨハネ 16:7

イエスが去って行けば弟子たちにとってより良いとは、どういうことだろうか。三年以上もの間、彼らはイエスと歩み、その教えを聞き、奇跡を見、食卓を共にしてきました。去られるという考えは彼らにとって壊滅的でした。しかしイエスははっきりと言われた——あなたがたの益になるのです、と。

理由は御霊にあった。イエスが弟子たちと共にご自分の肉体的・復活前のからだで臨在しておられる限り、その臨在は必然的に時間、空間、受肉によって制約されていました。イエスは一度にしか所にはしかいることができませんでした。ガリラヤで弟子たちの一グループを教えることができたが、サマリア、ローマ、あるいは地の果ての弟子たちに同時に語りかけることはできませんでした。しかし遣わされる御霊はそれらの制約に縛られません。

肉においてイエスと共にいたあの三年間がどれほど素晴らしいものであったとしても、それは決して目的地ではありませんでした。それは準備でした——新しい方法でイエスが来られるとき、弟子たちがイエスを認識できるほど深いイエスへの知識を彼らの中に築くための。御霊を通して、よみがえったイエスはすべての信者の内に、すべての場所で、すべての時において臨在されることになりす——かつて経験したどんなことよりも親密に、人を変える力をもって。

これこそイエスが復活祭からペンテコステまでの五十日間成し遂げておられたことであった。弟子たちを、三位一体と共に過ごす「大きな益」の時代——ペンテコステ後のいのち——に入る準備をすることである。最後の晩餐でイエスの去り行くことを嘆いた弟子たちは、昇天のときには大きな喜びをもってエルサレムに帰った同じ弟子たちであった。彼らの理解においてすでに何かが変わっていた。しかし完全な証拠は十日後に来た。

ペンテコステの日、御霊が来られ、すべてが一変した。逮捕の際にイエスを見捨て、女中の前でイエスを否み、鍵のかかった戸の内に隠れていた人々が、突然エルサレムの街頭に立ち、イエスの十字架刑を叫んだ群衆の面前でイエスを宣べ伝えていた。恐れはなかった。ためらいはなかった。イエスが約束された益が、見る者すべてに明らかだった。その日三千人が信じた。これが益とはいかなるものかである。

振り返り

イエスは御霊を通じたイエスとの関係は肉においてイエスを知ることよりも優れていると言われました。あなたはこれを信じるでしょうか。あなたの御霊との日々との関係はその確信を反映しているでしょうか。

天に昇られたイエスが御霊を通してあなたとともにいてくださるという意識的な現実の中で、今日一日を生きるとはどのようなものでしょうか。

第四部のまとめ——約束の解き明かし

イエスが約束された益は抽象的なものではありませんでした。それはサンヘドリンの前に立つペテロでした。一日で三千人が信じた出来事でした。怯えた少数の弟子たちから地の果てへと広がるイエスの使命の止まることのない前進を続ける働き——そのすべてが、イエスが約束し、解き明かし、遣わした御霊によって動かされていました。第五部では、働くことを止めることのないよみがえった主の御手の中で、その使命がさらに前進していきます。

第五部——よみがえった主、働き続ける

四十日間の復活顕現は昇天をもって終わりを迎えました。しかしよみがえったイエスは語ることをやめませんでした。ご自分が始められた使命から身を引かれることもありませんでした。イエスは統治するために昇天されました——そしてイエスにとって統治とは常に、ご自分の民への積極的で個人的な関わりと、福音が地の果てへと広がることを意味してきたのです。

ルカはこのことを理解していました。彼は使徒の働きの冒頭で、自分の福音書がイエスが始められたすべてのことを記録していると述べました。「始められた」という言葉は紛れもない意味を含んでいます。使徒の働きはイエスが継続してなされたこと——天から、御霊を通して、教会を通して——を記録しているのです。昇天は結論ではありませんでした。それは同じ御業の新しく限らない段階への移行です。この流れの中で、第五部が記す出来事が展開していきます。

ある意味で、第五部に記録されている顕現は最も重要なものです。四十日間はイエスが生きておられることを証明し、弟子たちをこれから来ることに備えさせました。しかし昇天後の顕現は、イエスがなぜ死なれ、よみがえられたかを示しています——今や時間と場所の制限を超えて進められる、永遠の御業を。敵サウロへのダマスコ途上での顕現、アナニアという怯えた弟子をまっすぐという通りの盲目の人のもとへ遣わされたこと、天から御霊を通してパウロとバルナバを任命されたこと、コリントで疲れ果てた使徒に個人的な恵みの言葉をかけられたこと——これが世界の中でなされる復活の御業です。これがイエスがよみがえられた目的です。そしてイエスはかつて、その御業をやめられたことがないのです。

第 38 日……第 10 回復活顕現

そしてイエスはヤコブに現れた

「次いで、ヤコブに現れ」

I コリント 15:7

ヤコブはイエスの弟でした——ヨセフとマリアの次男として、同じ家に育ち、同じ食卓を囲み、家族が深く心を乱した働きを始めるためにイエスが家を出て行くのを見ていた人物です。イエスの評判が「気が狂っている」という非難を招いたとき、ヤコブはイエスを連れ戻しに来た者たちの中にいました。十字架の六か月前、ヨハネははっきりと記しています——兄弟たちはイエスを信じていなかったのです。

しかしこの同じヤコブが、その手紙をこのような言葉で始めました。「神と主イエス・キリストのしもべ」。「主」という言葉——トマスが告白の中で用いたのと同じ言葉——は YHWH のギリシア語訳です。ヤコブは自分の兄が創造主であり、イスラエルの神であると告白していたのです。その二つの位置の間の距離——当惑した不信仰と三位一体の告白——は計り知れないものです。それを埋めるものはただ一つしかありません。

ヤコブへの復活顕現が唯一の納得のいく説明です。イエスは死からよみがえり、信じていなかった弟に個人的に現れてくださいました。その出会いはヤコブをエルサレム教会の長老、信仰のための殉教者、そして決して否定されることのない証人へと変えました——なぜなら彼はイエスをその生涯全体を通じて知っており、よみがえられたイエスを見るまで信じていなかったからです。

しかしここには、第五部が明らかにしていく別の何かがあります。ヤコブに現れることによって、よみがえったイエスはペンテコステ後に繰り返し繰り返しなされることをしておられました——信じていない者のもとに個人的に来られるということです。求められるのを待たず、弟子たちを通してのみなされるのではなく、追い求めて来られるのです。ヤコブが最初でした。ダマスコ途上のパウロが最も劇的なものとなります。その間にも、その後にも、よみがえった主はご自分をまだ知らない人々との距離を越えて手を伸ばすことをやめたことはありません。

これがイエスがよみがえられた目的です。ヤコブはその最初の証人です。

振り返り

ヤコブはよみがえったイエスを求めませんでした——イエスがヤコブのもとに来られたのです。あなたの人生の中に、イエスが手を伸ばされることをもはや期待しなくなった誰かいますか。ヤコブへのイエスの顕現は、イエスがどこまで行かれるかについて何を語っているのでしょうか。

ヤコブが疑いから告白へ、懐疑から殉教へと変えられたことは、まったくよみがえったイエスの働きによるものでした。あなた自身のいのちの中の、どの不信仰や抵抗の領域が、その同じ個人的な出会いを必要としているのでしょうか。

第 39 日……第 11 回復活顕現

あなたがたは力を受ける

「聖霊があなたがたの上に来られるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

使徒の働き 1:8

これらは昇天の前にイエスが語られた最後の言葉でした。イエスは弟子たちを最後にもう一度集められました。御霊について約束されたすべてのこと、上の部屋で説明されたすべてのこと、四十日間の復活顕現で示されたすべてのこと——それらすべてが今まさに成就されようとしていました。そしてイエスはそれをすべてひとつの最後の言葉に凝縮されました。

イエスが約束された力は抽象的なものではありませんでした。ペンテコステで成就されたその最初の瞬間から、それは特定の形で現れました——語ることに。おいて。「彼らはみな聖霊に満たされ、語り始めた。」御霊が来られ、その結果として言葉が続きました——弟子たちがかつて自分たちの力だけでは持続することのできなかつた確信をもって語られた言葉が。

これはイエスご自身を特徴づけていたのと同じ質でした。人々はイエスが語られるのを聞いて、何か違うものを認めました——単なる知性や情熱ではなく、権威を。イエスは知っておられる方として語られました。信者の内での御霊の御業はまさにそのことを生み出します。すなわちイエスが語り、なされたことの真理への深く落ち着いた確信です。それゆえわたしたちがイエスについて語る時、教えられたことの外側からではなく、知っていることの内側から語るのです。

ペンテコステの前、弟子たちは逃げ、否み、身を隠していました。ペンテコステの後、何も彼らを沈黙させることができませんでした。逮捕の際にイエスを見捨てたのと同じ人々が、イエスの十字架刑を求めた群衆の前でエルサレムの街頭に立ってイエスを宣べ伝えていたのです。イエスが約束された力は今や彼らに出会うすべての人に見えるものとなっていました。

その力はすべての信者に与えられている特権です。彼らを満たしたのと同じ御霊がわたしたちを満たします。彼らを遣わしたのと同じよみがえったイエスがわたしたちを遣わします。

振り返り

御霊の力は語ることに解き放たれます。あなたのいのちの中で、御霊があなたに語るよう促しているイエスについての言葉を、あなたはどこで押しとどめているのでしょうか。

ペンテコステの前、弟子たちは恐れゆえに沈黙していました。ペンテコステの後、何も彼らを止めることができませんでした。あなた自身の御霊の経験において、その二つの姿勢の間で何が変わりましたか——あるいは変わる必要があるのでしょうか。

第 40 日……第 11 回復活顕現（続き）

あなたがたはわたしの証人となる

「聖霊があなたがたの上に来られるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

使徒の働き 1:8

イエスが言われたことと言われなかったことに注意してください。「あなたがたはわたしの証人でなければならない」とは言われませんでした——まるで証しが果たすべき義務であるかのように。「あなたがたはわたしの証人となります」と言われました——まるでそれが御霊を受けることの自然な結果であるかのように。御霊が来られると、証しが起きます。わたしたちが自分を訓練したからではなく、わたしたちの内に生きておられる方がイエスを知らしめることに燃えておられ、その情熱がわたしたちのものとなるからです。

証人とは、自分が個人的に見、聞き、経験したことを語る人です。弟子たちは議論を提供したり教義を守ったりするよう命じられたのではありませんでした。知っていることを語るよう命じられたのです。「わたしは主を見ました。」「イエスはわたしに現れてくださいました。」「その恵みがわたしを見つけ、放さなかったのです。」これが御霊が力を与える証し——個人的で、正直で、よみがえったイエスとの出会いに根ざした証しです。

使命の地理は、次の段階に進む前に完了すべき順序ではありませんでした。それは絶えず広がり続ける同時的な広がりでの描写でした。エルサレムと地の果てが同時に。自分の通りでの証しに力を与えるのと同じ御霊が、世界の反対側での証しにも力を与えます。ご自分の民と常にともにいると約束されたよみがえったイエスは、すべての場所のすべての証人とともに、イエスが再び来られるまでいてくださいます。

ペンテコステの最初の瞬間から、この使命はすべてのことの骨格となりました。それは使徒の働きのアウトラインです。それは教会の全歴史の形です。そしてそれは、すべての世代のすべての信者へのよみがえったイエスの言葉であり続けています。あなたがたはわたしの証人となります。いつかではありません。今。ここで。あなたがいる場所で。

振り返り

証しは御霊に満たされることの自然なあふれ出しです。あなたはどれほど御霊に満たされていますか。あなた自身の日々のいのちのエルサレムで、あなたの証しはどのようなものですか。

証人は自分が個人的に見、経験したことを語ります。よみがえったイエスについてのあなたの証しは何ですか。最後に誰かにそれを語ったのはいつですか。

第 41 日……第 11 回復活顕現（続き）

祝福しながら

「祝福しながら、イエスは彼らを離れ、天に上げられた。」

ルカ 24:51

イエスは距離を置いてではなく、まさに祝福の行為の中で昇天されました。地上での最後の姿勢は、民の上に手を上げ、祝福の言葉をかけておられるものでした。これは偶然ではありませんでした。それはイエスのいのちと働きのすべてが伝えてきた最後の宣言でした。イエスは祝福するために来られました。祝福するために死なれました。祝福するためによみがえられました。そして手を上げたまま、なおも祝福を与えながら昇天されたのです。

昇天は祝福を終わらせませんでした——それは、高くあげられたイエスに属するすべての祝福が御霊を通してご自分の民に流れる完全な水路を開きました。パウロは、父なる神がキリストにあって天上のあらゆる霊的祝福をもってわたしたちを祝福してくださったと書いています。あらゆる祝福。イエスの昇天は引き退くことではありませんでした。それはすべての場所のすべての信者へ、制限なく遍在する祝福の御業の始まりでした。

天と呼ばれる遠い場所へイエスが消えて行かれたと想像するなら、わたしたちは昇天を誤読しています。イエスは遠くへ行かれたわけではありません。わたしたちが見たり触れたりできるすべてのものの背後にある目に見えない実在の領域へと入られたのです。その次元は遠くにあるのではなく、わたしたち自身よりも近くにあります。だからこそイエスは御霊の来臨がわたしたちの益になると言われたのです——より劣った臨在ではなく、より優れた臨在として。昇天されたイエスは遠くにおられません。これまで以上に近くにおられ、すべての場所のすべての信者の内に、すべての時において臨在しておられるのです。

弟子たちはイエスが去られた後、空を見上げながら立っていました。二人の御使いが彼らのそばに現れました。「なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、あなたがたが天に上って行かれるのを見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

その問いは実際的なものです。イエスを空の中に見つけることはできません。わたしたちはイエスをわたしたちとともに、わたしたちのいる場所で見出します。

それから彼らはイエスを礼拝し、大きな喜びをもってエルサレムに帰りました。これはすべてを語る細部です。彼らは主が雲の中に消えていくのを見たばかりでした。そして大きな喜びをもって帰りました。彼らは理解していたのです。イエスは彼らを去って行かれたものではありませんでした。いつもそうであったように、先に行かれたのです——すべての祝福が与えるためにイエスのものであるその場所へと。そしてイエスはなおも彼らを祝福しておられました。常にそうされるでしょう。

振り返り

イエスは民を祝福する行為の中で昇天されました。あなたへの最後の姿勢は祝福のものでした——そしてイエスは決してそれをやめていません。それはあなたが今日いのちを受け取る仕方をどのように変えるでしょうか。

昇天はイエスが去って行くことではなく、新しく無限の方法で臨在することです。その理解は、今のあなたへのイエスの近さについての考え方をどのように変えるでしょうか。

第 42 日

イエスは聖霊を注がれた

「神の右に上げられ、約束された聖霊を父から受けて、今あなたがたが見聞きしているものを注いでくださったのです。」

使徒の働き 2:33

昇天から十日が過ぎていました。百二十人の弟子たちはイエスが命じられたとおり、エルサレムで待っていました。すると起きました——風、火、そして多くの言語の声が通りに満ちました。群衆が集まりました。ペテロが十一人と共に立って語りました。そしてその説教の中でペテロは最も重要なことを言いました。あなたがたが十字架につけた方はよみがえり、父の右に上げられ、今あなたがたが見聞きしていることを注いでくださったのです、と。

これがペンテコステの核心です。高くあげられたイエスが御霊を注がれました。しかしここには約束が果たされた以上のものがあります。イスラエルの歴史を通して、御霊は個々の人々——王、祭司、預言者——に宿りましたが、受け継がれることはできませんでした。その注ぎはその人と共に終わりました。これがメシアの定義的な標しでした。メシアだけが、ご自分に宿る注ぎを、制限なく他者に注ぐことができるのです。それゆえペンテコステはイエスの約束の成就であるだけでなく、イエスが誰であるかの公的な証明でもありました。だからこそペテロはその説教を、三千人を膝まずかせた言葉で締めくくりました。「ですから、イスラエルの全家は、神があなたがたが十字架につけたこのイエスを、主ともキリストともされたことを、確かに知りなさい。」

これはその後続くものの理解を変えます。使徒の働きは初期の教会がイエスのために何をしたかの物語ではありません。よみがえったイエスがご自分の教会を通して何を継続してなされたかの物語です——すべての場所のすべての信者に、すべての世代において御霊を注ぎ続けておられること。新しい契約は注ぎに限りがないゆえに可能です。復活の意味は普遍的です。なぜならよみがえられた方がすべての人に届くことができるからです。

イエスは今も注ぎ続けておられます。彼らがその日見聞きしたことを、わたしたちは受けています。

振り返り

ペンテコステはイエスがメシアであることの公的な証明でした——御霊を制限なく他者に注ぐことができるのはイエスだけです。その現実あなたが受けた御霊の理解をどのように深めるでしょうか。

新しい契約はイエスの注ぎに限りがないゆえに可能です。それはイエスとのいのちにおいてあなたに何が与えられているかについての考え方をどのように変えるでしょうか。

第 43 日

主は毎日加えていくくださった

「主は毎日、救われる人々を加えて、仲間に入れてくださった。」
使徒の働き 2:47

ルカは意図的に継続時制を用いました。「主は人々を加えた」ではなく、「主は加え続けてくださった」——日々、絶えず。その動詞は継続する行為を表しています。天におられるイエスが、ご自分への信仰へと人々を積極的に引き寄せ、ご自分のからだに加え続けておられるのです。

これはイエスご自身の言葉の成就でした。「わたしは地から上げられるとき、すべての人をわたしのところに引き寄せます。」イエスは十字架で上げられ、復活で上げられ、昇天で上げられました。今や父の右から引き寄せておられます——積極的に、個人的に。エルサレムでその初期の日々に信仰に来たすべての人は、自分がイエスの名を知る前にイエスがすでにその人の内に働いておられたゆえに来たのです。

イエスが加えておられたその共同体は、使徒たちの教え、交わり、パンを裂くこと、そして祈りに全力を注いでいました。完全な共同体ではありませんでした。しかしイエスへと向かう共同体でした——そしてその向かい方が、主が成長をもって祝福し続けることのできる場所になっていたのです。

六年後、迫害が信者たちをエルサレムの外へと散らしたとき、同じパターンが続きました。キプロスとクレネから来た人々がアンティオキアへ行き、主イエスについて大胆に証しし始めました。そして再びルカの要約が続きます。「主の御手が彼らとともにあり、大勢の人が信じて主に立ち返った。」主の御手。すべての回心において、すべての都市において、すべての民の中において、イエスの積極的で個人的な関わりが。

よみがえり昇天されたイエスは今も教会に加え続けておられます。まだイエスの名を知らない人々を引き寄せ続け、御言葉が届くその瞬間に備えておられます。わたしたちはイエスの教会を建てません——イエスが建てておられます。わたしたちはイエスの器です。イエスが建設者なのです。

振り返り

イエスは今まさに継続的かつ積極的に人々をご自分のもとに引き寄せておられます。あなたの人生の中で、引き寄せられているかもしれない誰かがいますか。イエスがその人の中でなさっていることに、あなたはどのように加わることができるでしょうか。

初期の教会は教え、交わり、パンを裂くこと、そして祈りに専念しました——そして主は毎日その数を加えてくださいました。あなたの共同体のいのちの質は、主が成長をもって祝福してくださる教会のあり方をどのように反映していますか。

第 44 日

立っておられる人の子

「見なさい、天が開けて、神の右に人の子が立っておられるのが見えます。」
使徒の働き 7:56

ステパノは使徒たちの証しを通して信仰に came ました——イエスの地上の働きの目撃者としてではなく、彼らの言葉を通じて信じ、御霊を受け、並外れた信仰と力の人へと成長した者としてです。このように、ステパノはわたしたちとまったく同じでした。新しい契約のペンテコステ後の弟子として。

サンヘドリンが彼の証しに飽き足り、殺意をもって彼に殺到したとき、ステパノは天を見上げました。聖霊に満たされ、神の栄光を見ました——そしてイエスを。「見なさい、天が開けて、神の右に人の子が立っておられるのが見えます。」

これが聖霊の御業です。イエスは約束しておられました。「御霊はわたしを証しします。」御霊の御業はイエスが見えるようにすることです——常に臨在しているが常に知覚されているわけではないお方に信者の目を開くことです。御霊に満たされた人々はイエスに焦点を当てます。そして、ステパノのように、見聞きしたことについて語ります。サンヘドリンの前での彼の証言は議論ではありませんでした。証しでした。彼は主を見ていたのです。

新約聖書は通常、イエスを神の右に座っておられると語ります——敵が足台とされるまで統治しておられる王の姿勢として。しかしステパノはイエスが立っておられるのを見ました。イエスは王座から立ち上がっておられました。ご自分のしもべに起きていることに強く臨在し、完全に関わっておられたのです。

ステパノを迫害することはイエスご自身を迫害することでした。彼らは聖霊を通してひとつとして結ばれていました。イエスはしもべの死の傍観者ではありませんでした。立っておられました——証ししながら、とりなしながら、ステパノが最後まで忠実であるよう力を与えておられました。

ステパノは祈りながら死にました。「主イエスよ、わたしの霊を受け取ってください。」そして「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」それは十字架上でイエスが祈られたのと同じ祈りであり、今ステパノが自分自身のいのちを代価として祈ったのです。イエスの御霊がステパノの性格をそれほどまでに形成していたので、死においてさえ彼は主の生ける姿でした。

サウロという青年が立って見ていました。石を投げた人々の上着を預かっていました。ステパノのために立ち上がられたよみがえったイエスは、彼を殺すことを助けていた人の内にすでに働いておられたのです。

振り返り

イエスは御霊がイエスを証しすると約束されました——御霊に満たされた人々にイエスが見えるようにすることです。あなたはどれほどはっきりとイエスを見ていますか。あなたが語ることのどれほどが、あなたが実際にイエスについて見聞きしたことを反映していますか。

イエスはステパノが殺されていたとき、王座から立ち上がられました。イエスはあなたの最も辛い瞬間に個人的に強烈に臨在しておられます。それはあなたが困難や反対に向き合う仕方をどのように変えるでしょうか。

第 45 日……第 12 回復活顕現

なぜわたしを迫害するのか

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

使徒の働き 9:4

タルソのサウロは教会の最大の迫害者でした。彼はステパノの殺害に全面的に同意して立ち会い、石を投げた者たちの上着を見守り、エルサレムの教会を荒らし回り、男女を家から引きずり出して投獄しました。今も脅迫と殺意に満ちながら、ダマスコで信者たちを捕まえる許可を持ってその道を歩んでいました。

突然、天からの強烈な光が彼の周りに輝きました。彼は地に倒れました。そして声が聞こえました。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」

「主よ、あなたはどなたですか。」

「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

これはイエスの第 12 回復活顕現でした——昇天から六年後、誰も予期しなかった最後の人物に対して起きたものです。昇天はご自身を見えるように現す能力を終わらせていません。それは単に、イエスの臨在の様式を地上に縛られたものから普遍的なものへと変えたのです。

イエスが問われたのは叱責ではなく、明かしでした。サウロは危険な一派を迫害していると思っていました。イエスはご自分の民に向けられたすべての打撃がイエスご自身に対して個人的に向けられた打撃であることを明らかにされたのです。よみがえったイエスと教会との結合は完全です。一方に触れることは他方に触れることなのです。

この出会いがパウロに教会についての独自の理解を与えました。使徒たちの中でパウロだけが教会をキリストのからだというイメージを発展させました——その理由はまさにここに 있습니다。彼は回心の最初の瞬間からそれを経験していたのです。教会はイエスが設立した組織ではありません。それはイエスの生けるからだであり、イエスはその活発なかしらです。昇天はそのかしらとしての地位に必要な前提条件でした——イエスはどこでも、常に、全体のからだのかしらとなるために昇天されました。御霊を通して天からそれを導いておられます。イエスは遠くにいる創設者ではありません。地上で各からだの肢体を通して今もなしておられる生けるかしらなのです。

サウロは盲目となって地から起き上がり、手を引かれてダマスコに入りました。三日間、食べも飲みもしませんでした。祈りに身を捧げました。神のみこころを行っていると確信していた者が、自分自身と神についての自分が知っていたすべてが廃墟の中に、暗闇の中に座っていました。イエスはまだ彼との御業を終えておられませんでした。終えたのではなく、形を変えて続けておられるのです。

振り返り

イエスのご自分が迫害される民と完全に同一視されました。「なぜわたしを迫害するのか。」教会とのイエスの深い結合——あなたとの——は、あなたに起きることについての理解をどのように形成しますか。

パウロの教会をキリストのからだとする神学全体がダマスコ途上で生まれました。自分自身をキリストのからだの生ける肢体として、よみがえったイエスを自分の活発なかしらとして理解することは、あなた自身のいのちと召しについての考え方をどのように変えるでしょうか。

第 46 日

わたしがあなたに現れたのはこのためです

「わたしはあなたに現れました。あなたを補佐者、また見たことと、これからわたしがあなたに示すことの証人として任命するためです。」

使徒の働き 26:16

よみがえったイエスはパウロを塵の中に倒れたままにしておかれませんでした。すぐに再び語られました。その出会いの衝撃を取り上げ、それを使命へと変える言葉をもって。起きなさい。足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのには目的があります。

すべての復活顕現はこのパターンに従っていました——出会い、そして派遣。イエスは好奇心を満たすためだけに、あるいは悲しむ者を慰めるためだけに現れたものではありませんでした。遣わすために現れました。パウロへの顕現も同様でした。ただ遣わされる者が、誰もが選ばなかった最後の人物であったことを除けば。イエスは使命がそれを必要としていたゆえに、まさにその人物を選ばれました——よみがえった主との出会いによって変えられた元敵、異邦人の世界の目を開いて彼らを暗闇から光へと変えるために遣わされた者として。

これは、からだのかしらが肢体の特定の召しへと一員を導いておられるのです。パウロに与えられた使命はパウロのアイデアでも教会のアイデアでもありませんでした。それはよみがえったイエスご自身の使命であり、砕かれた、自発的な器を通して前進するものでした。パウロは後に書いています。「もはやわたしが生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられます。」彼の全宣教は、始めから終わりまで、イエスの継続的な御業がパウロを通してなされるものでした。パウロ自身がそう言っています。「キリストがわたしを通して成し遂げてくださったことのほかは、何も言う気になれません。」

イエスはパウロをユダヤ人とも異邦人とも合わせると約束されました——苦難を取り除くことによってではなく、その中で彼を支えることによって。これが使徒の働き全体を貫くパターンです。苦しみからの免除ではなく、その只中での臨在。ステパノのために立たれた同じイエスがパウロのためにも立ってくださるでしょう。約束は容易な御業ではなく、最も困難な道での忠実な同伴でした。

振り返り

イエスはパウロに「このためです」と現れました——すでに心に決まった特定の召しをもって。よみがえったイエスがあなたにご自身を知らせてくださった目的を、あなたはどれほどはっきりと理解していますか。

パウロへの使命はからだのかしらが肢体をその召しへと導いていることでした。あなた自身の召しをよみがえったイエスが個人的に定めてくださったものとして理解することは、あなたがそれに向き合う仕方をどのように変えるでしょうか。

第 47 日

アナニア、サウロのところへ行きなさい

「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶために、わたしが選んだ器です。」

使徒の働き 9:15

サウロはダマスコで暗闇の中に、盲目で、断食し、祈りながら座っていました。そして街の別の場所で、よみがえったイエスがアナニアという弟子に現れました——それ以外は知られていない信者に——そして驚くべき任務を与えられました。まっすぐという通りへ行きなさい。タルソのサウロを見つけなさい。彼は祈っており、あなたを待っています。

アナニアは抗議しました。サウロのことは聞いていました。誰もが知っていました。これはまさにアナニアのような信者を逮捕するためにダマスコに来た人物でした。その求めは危険だけでなく、不条理に思われました。

イエスはひるまれません。 「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶために、わたしが選んだ器です。」

これはからだのかしらが一つの肢体を別の肢体のもとへ導いておられるのです。サウロはまだ、自分が迫害していたからだの肢体であることを知りませんでした。アナニアはまだ、自分が恐れていた人物が教会史上最大の宣教師となることを知りませんでした。イエスは両方を知っておられました。どちらの目にも見えない方法で、すでに両者の内に御業をなし、糸を引き合わせておられたのです。

アナニアは行きました。家を見つけ、中に入り、サウロに手を置いて言いました。「兄弟サウロ、あなたが来た道で現れた主、イエスが、あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるように、わたしを遣わされました。」すぐにうろこのようなものがサウロの目から落ちました。再び見えるようになりました。聖霊に満たされ、起き上がり、バプテスマを受け、食事をしました。

イエスはパウロの回復を完了するために普通の怯えた弟子を通してなさることを選ばれました——使徒を通してでも、幻を通してでもなく、アナニアを通して。サウロを直接癒すことができたでしょう。代わりに教会を関与させることを選ばれました。これは今もイエスのパターンです。イエスは自発的で従順な人々を通して——しばしば知られていない人々、抗議し恐れている人々を通して——ご自分の目的を進めてくださいます。わたしたちは自分の従順に何がかかっているかを常に知るわけはありません。しかしイエスをご存じです。

振り返り

からだのかしらはアナニアをサウロのもとへ遣わされました——一つの肢体を別の肢体へと、それぞれがイエスのなさっていることを知らないままに。よみがえったイエスがあなたを向かわせようとしている、ありそうもない、あるいは不快に思える誰かがいますか。アナニアのような従順とはどのようなものでしょうか。

イエスはアナニアにサウロがしていることを正確に告げました——「彼は祈っています。」よみがえったイエスはすべての人がどこにいるか、何を必要としているかを完全に知っておられます。その知識はあなたの周りの人々のための祈り方をどのように形成しますか。

第 48 日

わたしのために聖別しなさい

「わたしが召した働きのために、バルナバとサウロをわたしのために聖別しなさい。」
使徒の働き 13:2

昇天から二十年が過ぎていました。アンティオキアの教会は繁栄する多国籍の信者の共同体となっていました——福音が今や広い異邦人世界へと届く拠点となるべき共同体です。教会の指導者たちが礼拝し断食しながら集まっていたとき、聖霊が語られました。「わたしが召した働きのために、バルナバとサウロをわたしのために聖別しなさい。」

御霊の言葉の背後にはよみがえったイエスご自身がおられました。イエスはこう言われていたからです。「御霊はご自分から語ることはありません。イエスから聞いたことだけを語ります。」これは昇天したからだのかしらがその次の大きな動きへと教会を導いておられたのです。アンティオキアの教会への御霊の語りかけはイエスが天から語っておられることでした——個人的に、具体的に、復活から二十年後もなお積極的にご自分の使命を導きながら。

教会は祈り断食し、パウロとバルナバに手を置き、彼らを遣わしました。従順は共同体的でした——コミュニティ全体がイエスの導きに参加して。大宣教命令が前進するのはこのようにしてです。孤立した英雄的行為を通してではなく、御霊に耳を傾け最もよい人々を最も困難な場所へと送り出す弟子たちの共同体を通して。

しかし使命の中で最も重要な言葉は最も小さなものでした。御霊は「使命のために聖別しなさい」とは言われませんでした。「わたしのために聖別しなさい」と言われました。パウロとバルナバはイエスのものでした。彼らの使命はイエスの使命でした。宣教の企ては人間のプロジェクトをイエスが祝福するのではなく——それはイエスご自身のプロジェクトであり、自発的で従順なからだの肢体を通して前進するものです。

これは今もすべての信者へのよみがえったイエスの言葉です。課題のために聖別されるのではありません。わたしのために聖別されるのです。

振り返り

パウロとバルナバを聖別せよという御霊の召しは、天からのイエスご自身の言葉でした。あなたの共同体は誰が遣わされるべきか、どこへ遣わされるべきかについての御霊の導きにどれほど注意深く耳を傾けていますか。

御霊は「使命のために」ではなく「わたしのために聖別しなさい」と言われました。あなた自身の召しをイエスご自身のために個人的に聖別されることとして理解することは、その召しへの向き合い方をどのように変えるのでしょうか。

第 49 日

この都市には多くの民がいる

「恐れることなく、語り続けなさい。黙ってはいけません。わたし自身があなたとともにいます。……この都市にはわたしの民が多くいるからです。」

使徒の働き 18:9-10

パウロはへとへとになってコリントに着きました。ピリピで打たれ、テサロニケから追い出され、ベレアから急いで逃げ出し、アテネで懐疑に出会っていました。疲れ果て消耗していました。そのとき夜の幻の中でよみがえったイエスがパウロのまさにその状態に語りかける言葉をもって来られました。

「恐れることなく、語り続けなさい。黙ってはいけません。わたし自身があなたとともにいます。だれもあなたを襲って危害を加えることはありません。この都市にはわたしの民が多くいるからです。」

三つのことが語られました。命令。約束。理由。

命令。「恐れることをやめなさい、語り続けなさい。」パウロは恐れに免疫がありませんでした。打撲傷、投獄、難船を耐えてきた人物が、コリントで黙ることを考えるほど疲れていました。イエスはその恐れに直接、現在の命令形をもって語られました——すでに感じていることに負けることをやめなさい、と。命令は恐れをなかったことにするものではありませんでした。恐れに直面した上で従順を選ぶようにということでした。

約束。「わたし自身があなたとともにいます。」「わたしの祝福があなたとともに」でも「わたしの力があなたに用意されている」でもありません。わたし自身が。よみがえったイエスの個人的な臨在——抽象的な神学的現実としてではなく、パウロの状況、恐れ、まさにその必要を知っている方の、生きた日々の同伴として。これは大宣教命令の最後の約束の成就でした。「わたしはいつもあなたがたとともにいます。」

理由。「この都市にはわたしの民が多くいます。」彼らのうちの一人もまだ福音を聞いていないのに、彼らはすでにイエスのものでした。イエスはいつもそうしてきたように、引き寄せておられました。パウロの宣教を通して彼らを救おうとしておられました。その使命は疑わしいものではありませんでした。パウロはコリントに十八か月とどまり、新約聖書そのものを形成することになる教会が生まれました。

よみがえったイエスは今もこの言葉を語っておられます。まだイエスの名を聞いていない多くの民がいる都市や共同体をイエスはご存じです。イエスは今も怯え疲れ果てたしもべたちに命じておられます。「恐れることをやめなさい。語り続けなさい。わたしはあなたとともにいます。」

振り返り

イエスは「この都市にはわたしの民が多くいる」と、彼らの誰もまだ信じていないうちに言われました。よみがえったイエスがすでにあなたの地域の人々を所有されているということを知ることは、彼らへの証しと祈りへの向き合い方をどのように変えるのでしょうか。

パウロは疲れ果て恐れていました。そしてイエスはまさにその必要の瞬間に個人的な言葉をもってパウロのもとに来られました。あなたが奉仕の中で最も疲弊したとき、よみがえったイエスの臨在と励ましをどのように受け取っていますか。

第 50 日

わたしの力は弱さの中でこそ十分に現れる

「わたしの恵みはあなたに十分です。わたしの力は弱さの中でこそ十分に現れるのです。」
II コリント 12:9

これは復活から約二十五年後、本物の、和らぐことのない痛みの瞬間に疲れた使徒に語られた、パウロの手紙の中のよみがえったイエスの最後に記録された言葉です。

パウロは肉体のとげを与えられました——彼がサタンの使いと呼ぶほど苦痛な身体的苦しみです。彼はイエスにそれを取り去っていただくよう三度、具体的に祈りました。そのたびに答えはノーでした。しかしそのノーは言葉と共に来ました。「わたしの恵みはあなたに十分です。わたしの力は弱さの中でこそ十分に現れるのです。」

これは新しい言葉ではありませんでした。イエスが最初から教えてこられた言葉でした。偉大になりたい者はすべての人のしもべとなりなさい。自分のいのちを失う者がそれを見出します。メシアご自身も栄光に入る前に苦しまなければなりませんでした。御国のパターンは変わったことはありません——神の力は弱さを回避するのではなく、弱さを通してなされます。とげは間違いではありませんでした。信仰の失敗でもありませんでした。パウロの自足が打ち砕かれ、復活の力が流れ込む場所だったのです。

パウロは書いています。「わたしたちはこの宝を土の器の中に入れていますが、それは、この並外れた力がわたしたちからではなく、神から出ているとわかるためです。」器は壊れるものでなければなりませんでした。そうでなければ、内側の宝の功績を主張してしまうからです。

それゆえパウロは自分の弱さを誇ることを学びました——苦しみそのものを喜ぶためではなく、すべての弱さがイエスの十分さへの別の入口だったからです。「わたしが弱いときにこそ、わたしは強いのです。」これが福音の核心にある逆説です。

そしてこれがこの五十日の旅におけるよみがえったイエスの最後の言葉です。力による勝利ではありません。恵みによる勝利です。イエスの恵みはすべての弱さ、すべての失敗、すべてのとげに十分です。

イエスはよみがえっておられます。イエスは統治しておられます。イエスは語っておられます。そしてイエスはいつもわたしたちとともにいてくださいます。

振り返り

イエスはパウロの癒しの祈りに、より大きなイエスへと開いてくださったノーをもって答えられました。あなたのいのちの中に、イエスに取り去っていただくよう祈ってきた弱さや痛みがありますか。パウロへのイエスの言葉はあなたのその場所にどのように語りかけるのでしょうか。

この信仰の書のこの五十日は、よみがえったイエスの言葉と行為の旅してきました。どの言葉があなたを最も形成しましたか。あなたが聞いたことをもって何をしますか。

旅を続けるために

この五十日間は、復活祭からペンテコステまで、よみがえったイエスの言葉と行為をたどってきました。しかしよみがえった主はペンテコステで語るのをやめられませんでした——そして旅もまた続きます。

イエスご自身の言葉でイエスに聞き続けるために役立つ他のリソースがあります。下に掲載しています。

無料の副読本：『イエスによる力の秘密』

この五十日間の旅の中のよみがえったイエスの最後の記録された言葉は、本物の和らぐことのない痛み瞬間に疲れた使徒に語られたものでした。

「わたしの力は弱さの中でこそ十分に現れる。」

その言葉は一度きりではありませんでした。それはイエスが最初から生きてこられたパターンであり、すべての弟子に今生きるよう呼びかけておられるパターンです。

『力の秘密……イエスによる』は、イエスが体現し宣言された最も逆説的な真理の一つに焦点を当てた短い副読本です。神の力は弱さを回避するのではなく、弱さを通してなされるのです。

この五十日間でよみがえった主がどのように働き続けておられるかを示してきたなら、『力の秘密』はその働きがあなたの日々のいのちの原則となる方法を探求します。

この巻の無料の副読本として提供されています。無料ダウンロードはこちら：
www.johnstephenwright.com

基礎：『イエスによる十字架』

あなたが歩んできたこの五十日間は空の墓から始まります。しかし空の墓は十字架と切り離すことができません。

イエスはお自分の死の前に、十字架について復活顕現に込めたのと同じ明確さをもって語られました。その意味を後の解釈に委ねませんでした。事前に説明されました——十字架が何を成し遂げるのか、なぜ必要なのか、イエスに従う人々のいのちをどのように形成するかを。

『十字架……イエスによる』はこの本と同じ方法に基づいた三十日の信仰の書です——イエスがお自分の働きをご自分の言葉でどのように解釈しておられるかに耳を傾けること。十字架を予告し、その意味を解釈し、成就した方法をたどります。

五十日間聞いてきたよみがえった主は、「永遠に完成された」と言われたのと同じ主です。

無料ダウンロードはこちら：www.johnstephenwright.com

つながり続けるために

この五十日間がイエスをより深く知りたいという願いを呼び起こしたなら、「デイリー・ジーザス・ニュース」が次のステップです。

「デイリー・ジーザス・ニュース」は、イエスの誕生から復活顕現まで、イエスの完全な生涯と教えを年代順に網羅する三百六十五本の長文研究シリーズです。各研究は、この本で経験したのと同じ方法に基づいています。イエスご自身の言葉に、歴史的順序の中で注意深く耳を傾けること。

「デイリー・ジーザス・ニュース」で過ごす一年は、イエスが語られ行われたすべてのことを通じてイエスと歩む一年です。信仰の一瞬以上を求める人々のために設計されています——従っているお方のいのちと教えの中で、持続的で年代順の形成を求める人々のために。

論争はありません。神学的な喧噪也没有。聖書のイエスへの持続的な注意だけがあります。

ウェブサイトには「イエスによる」シリーズの新刊および予定刊行物、追加の弟子訓練リソース、そしてイエスを知らせることに献身する人々のための他のツールについての情報も掲載されています。

www.johnstephenwright.com

著者はあなたのこの五十日への応答をぜひ聞かせてください。連絡先：wrightjohns@mac.com